
バカとけいおん！と召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとけいおん！と召喚獣

【Nコード】

N4050Z

【作者名】

直井刹那

【あらすじ】

バカテスの文月学園にけいおん！のメンバーたちが入ってきて、オリ主や明久たちバカテスキャラと軽音部で学園生活を過ごしていく物語です。

この物語の設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。

また『けいおん！』とのクロスものです

オリ主が幼馴染の明久ともう1人の幼馴染と

秀吉、雄二、ムツリー二等のFクラスメンバーやAクラスメンバーと

そしてけいおん！の唯・澪・律・紬や憂・和・梓たちと

楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

バカテストとけいおん！の話を混ぜながらの話になります。

また、この物語は明久たちが入学してからの物語になります。

1年次はけいおん！メインの物語で、

2年次からバカテストメインにしていきたいと思っています。

物語設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』と『けいおん！』のクロスものです

設定

- ・オリ主が明久たちバカテストメンバーとけいおん！メンバーと文月学園にて日々を送っていきます。
- ・明久はもちろんの事、観察処分者です。
- ・オリ主と明久が軽音部に入部します。

原作との変更点

- ・明久は姫路に恋心を抱いていない
- ・開始が2年時ではなく1年時からになっています。
- ・なのでオリ話になる可能性があります。
- ・また、1年時はけいおん！メインでいき、2年時からバカテストメインになります。

また書いているうちに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

ブローグ 天然さんとの出会い

まだ肌寒い3月。俺達とはある高校に向かって歩いてた。

智也「……」

陽一「ハア……」

智也「……」

陽一「ふう……」

明久「……」

陽一「あああ……」

智也「……おい」

陽一「……なに？」

智也「さっきからうるさいんだけど」

俺は隣りを歩く俺の悪友である『春原陽一』に向かって言う。

陽一「しかたねエじゃん！！緊張してんだから！！

心臓が破裂しそうな勢いなんだよ！！

だから緊張してんだよ！ビビってんだよ！」

智也「……落ち着けよ。日本語がおかしいぞ。」

あと急にテンションあげんな…かなりウザいから」

陽一「ウザいとか言うなよ！傷つくだろ！！」

……はあ。つうか、なんでお前そんなに落ち着いてんの？
今日が何の日か分かってるのか？」

明久「高校の合格発表の日だね」

そう。今日は文月学園の合格発表の日だ。

陽一「そくだよ！なのにアナタたちはそんなに落ち着いてるんですか！？」

フツ―緊張するもんでしょうが！！」

智也「俺はお前と違って受かる自信あるしな。

それに明久を見てみるコイツだって落ち着いてるだろうが」

陽一「うわツ！ウゼエ！ってなんで明久も落ち着いてるんだ？

明久だってあまり成績良くないだろ？こっち側でしょうが！
？」

明久「まあそうだけど…ここまできたら腹くるしかないしね」

智也「明久だってこうなんだぞ。ほら、さっさと行くぞ」

陽一「ハア。あいよ…」

今日は俺達が受験した高校の合格発表の日だ。

多くの中学生達が歓喜に湧いたり、悲しみに涙する日である。

だから普通は陽一のように緊張するんだろうが、（コイツの場合は

異常だが…)

俺は普通に合格できる範囲だったし、試験も解けたから大丈夫という自信がある。

そんなことを考えてたら高校に着いた。

陽一「やべー着いちまったよ。ヤバイよ？マジヤバイよ!!」

智也「何がヤバいんだ。いいかげんハラくれればカ」

明久「そうだよ。それに大丈夫だよ。

僕達智也に教えてもらったんだから大丈夫だよ」

今回の受験のために明久と陽一は智也に勉強を教えてもらっていた。自慢じゃないが中学の時は成績は上位だったからな。

流石に合格発表の日とあって学生が多い。

おそらく合格したんだろっ、友達同士抱き合って喜んでいる者、嬉し涙を流している者、ケータイで笑顔で電話している者などがそこにはいた。

陽一「なあ智也君お願いがあるんだけど…」

智也「……なんだよ？気持ち悪いな」

陽一「俺の代わりに合否を見てきてくれッ!」

智也「はあ？何でだよ？自分で見ろよ」

陽一「極度の緊張により足が動きません…」

智也「お前ただけビビってたよ

……バカなこと言っただけで行くぞ、明久手伝え」

明久「うん」

ガシッ！×2

ズリズリ…

陽一「ちよっ！？やめ、離せ！」

バカなことを言っているアホの襟首を掴んで無理矢理、合格発表が行われている掲示板に引きずっていく。

パッ

ドゴォ！

陽一「うげッ！！」

掲示板に着いたので今まで引きずっていた陽一^{バカ}を離す。

陽一「何すんだテメエ！！イテエじゃねエか！！」

智也「うるせエな。わざとだ。それにここまで運んでやったんだ、

感謝されこそすれ恨まれる筋合いはねエぞ」

となりでまだギャーギャー言ってるバカを放って俺は掲示板を覗く。

智也「さて俺の番号はっと…」

俺の番号は167番だ

智也「おっ あったあった」

掲示板には俺の番号が書かれてあった。

智也「やっぱ受かってたな」

俺が思っていた通り、見事に合格していた。

智也「…で？お前らはどうだったんだ？」

明久「と、智也！僕も受かってたよ！！」

智也「お、良かったな明久」

明久「智也が勉強教えてくれたおかげだよ」

智也「で、陽一は？」

陽一「…まだ見てない…」

智也「早くしろよ」

陽一「…怖いっす…」

智也「このビビりめ」

陽一「頼むよ？一生のお願いだッ！俺の変わりに見てくれ！！」

智也「……こんなので一生の願いなんてするなよ。

まあ土下座でもしたら見てやっても……」

俺は悪ふざけでそういうと

ガバッ

陽一「お願いします」

その場で土下座するアホ。

こいつにはプライドはないのか…

明久「・・・本当に土下座してるよ」

智也「本当にするなよ………わかった…見るから、土下座やめろ

俺たちがハズかしいから」

陽一「サンキュー…流石、俺の親友だ」

智也「そんな風に思ってたんのお前だけだから」

明久「だね」

陽一「…ひどッ！！」

さて、コイツは受かってんのかね…

陽一の番号を探す…確か番号は159番だな。

番号を探す…

………

ポンッ

智也「…陽一」

陽一の肩に手を置き、神妙な顔で俺は告げる。

陽一「ど、どうだった…？」

明久「智也、どうだったの？」

智也「……あのな…非常に言いづらいんだが……お前は……」

陽一「…な、なに…？」

明久「え？」

智也「…残念ながら……………

……………受かってたぞ……………」

陽一「…そっかぁ…ダメだったか…まあ仕方がないよな…

これも運命……………って受かってんのかよ！！！！」

智也「おおー見事なノリツツコミだな。さすが陽^{バカ}一だ」

陽一「なんでそんな紛らわしいことすんだよツ！！！！

てゆうか『残念ながら』っなんだ！！」

智也「そんなの決まってるだろ。面白いからしかないだろ！
それに残念なのは俺だ。またお前と一緒になんだから」

陽一「お前最低だな！！」

智也「まあ落ち着け。良かったじゃねエが無事合格出来て」

陽一「ぐッ…まあね…そっか合格したんだ俺……………良かった

……………良かったよ！智也くん！！」

明久「良かったね陽一」

バツ！

急にバカが俺に抱き付こうとしたので俺は…

ドゴォ！！！！！！

陽一「ぶバァ！！！！」

渾身の回し蹴りを放ってやった。

陽「イテエじゃねーか！」

智也「気持ちわりイ事してんじゃねエよ……アホが」

男に抱き付かれる趣味はねエ。

さて、そろそろ退散するか。

何やら今の一件で目立ってしまったようだ。

俺が騒いでいるバカを置いて帰ろうとすると、
後ろから突然声を掛けられた。

唯「あの、すいません！け、結果発表、一緒に見てくれませんか！
？」

振り返ると、若干癪毛気味の少女がいた。

智也「……はあ？何で？」

唯「じ、実は……一緒に来てくれるはずの友達が風邪で

来れなくなって妹も用事で来れなくなっちゃったんです……。

「

少女は暗い顔でそういう。

智也「そうか……分かった。

一緒に見てやるからそんな顔すんなって」

さすがにそんな顔されたら断りにくいしな。

唯「ほ、ほんとですか!？」

智也「ああ。ほんとだ」

陽一「ねえ僕の時と対応違わない？」

智也「気のせいだ」

明久「気にせいだよ」

陽一「いや、気のせいじゃ うべっ」

俺は陽一を黙らせて（腹を殴り気絶させて）

智也「じゃあ、ちよつと一緒に見てくるから

明久この陽一^{バカ}のこと頼むわ」

明久「わかった。じゃあ陽一連れて先に帰るね」

智也「悪いな。じゃあまたな」

明久「うん、じゃあね」

俺はそういうと癖毛気味の少女のところへ向かう。
陽一は明久に頼みつれて帰ってもらったことした。
居ても皆さんの邪魔にしかないからな。

.....

智也「ほら、せーので見るからな」

唯&智也「「せーの！」」

自分の番号でもないのに一瞬、ドキツとする。

唯「あ、あつた！やったー！！！！」

あ、そうだ。自己紹介遅れました！

私、平沢唯です。唯って呼んでください！」

智也「俺は中川智也だ。よろしくな平沢」

さすがに初対面の人間を名前で呼ぶのはな……………

唯「トモ君だね！！！」

アレエ？いきなり下の名前で？しかももうあだ名かよ。
ちよつとハズかしいんだけど……

そこへ1人の女の子が駆け寄ってくるのが見えた。

憂「お姉ちゃん！」

唯「あ、憂だ〜！」

智也「……妹さんか？」

憂「用事早く済んだんだ。お姉ちゃん、この人は？」

唯「あ、紹介するね。掲示板一緒に見てくれたトモ君だよ！」

憂「お姉ちゃんがお世話になりました。トモさん」

智也「いや、別に俺は何もしていないよ。

それと俺の名前は中川智也っていうんだ。よろしく」

憂「あ、失礼しました。智也さん。よろしくお願いします。

お姉ちゃん、あだ名付けるのが好きなんです！」

そうなのか？

ハズかしいからやめてほしいんだが

唯「トモ君、メアド交換しようよ！」

智也「トモ君はやめろ。ハズかしいから。まあメアド交換はかまわないが」

唯「ええ〜。可愛いのに」

可愛いってあまりうれしくないな……。

憂「私もいいですか？」

メアド送信&受信完了。

憂「あのー、よろしければ智也さんも一緒に夕飯どうですか？
といっても、レストランなんですけど・・・。」

唯「とってもおいしいんだよ！ー押しなんだよ！」

うーん、どうするかな。

でも、何かアレだな。

さすがにそれは気まずいな・・・。

智也「・・・遠慮しとくよ。家族でごゆっくり・・・。」

唯「えええー！！！」

俺が断ろうとすると平沢姉が声をあげる。

憂「お姉ちゃん、無理言ったらだめよ」

妹は必死に姉を宥めている。余計、断り辛い・・・。

智也「わ、わかった。目線痛いから、そんな顔するな！」

憂「え？良いんですか？智也さんはご家族とは予定ないんですか？」

智也「ああ両親は海外で仕事してて俺、1人暮らしなんだ。」

だから別にかまわないんだが良いのか俺なんかがお邪魔して」

さすがに今さつき知り合った人間がいきなりご家族と食事なんて少し気まずいからな。

憂「それは大丈夫ですよ」

「平沢家一押しのレストラン」

平沢・父「智也君も大変だね」

智也「い、いえ・・・でももう慣れてましたから」

憂「あ、お姉ちゃん！口にソースが・・・。」

唯「え、どこそこ？」

憂「動かないでお姉ちゃん！」

唯「ありがと、憂」

本当にできた妹さんだな。

結局、俺は平沢姉妹と一緒に食事に行く事になり、ご馳走にまでなった。

キャラ紹介（1）

なかがわともや
中川智也

性別：男

誕生日：9月10日（乙女座）

身長：182cm

得意教科：英語・数学

苦手教科：古典

趣味：読書・ゲーム・バスケット・音楽鑑賞・演奏

ギターやベース

特技：料理（明久にはかなわない）・ギターとベース・バスケット
外見：見た目はクラナドの岡崎朋也で、髪の色・目の色は黒、

左眉に切傷痕があるので見た目はヤンキー。

性格：中身は家庭的で、女心にも疎い朴念仁。だが、変な所で鋭い。

また、温厚で面倒見も良く陽気な性格であり友達思い。
そして負けず嫌い。

- ・運動神経がよく、中学時代はバスケット部の部長だった。
- ・運動神経が良かったため雄二並の武力を持つ。

また、成績も優秀で中学時代では常に上位をキープしていた。
よって文武両道。

- ・明久と陽一とは幼稚園からの付き合い。
- ・食べる事が好きで鞆の中にお菓子を常備している。

だが、味覚はお子様で酸っぱい物やワサビが苦手。
寿司屋ではサビ抜きでいつも頼んでいる。

- ・両親は海外にて仕事をしているので1人暮らし中。

使用楽器

ギター：ホライゾン

すのはらよついち
春原陽一

性別：男

誕生日：2月17日（水瓶座）

身長：167cm

得意教科：保健体育

苦手教科：保健体育以外の全て

趣味：読書・ゲーム・サッカー

特技：サッカー

外見：クラナドの春原陽平

性格：陽気な性格であり友達思いで、家族思い。

・サッカー部の先輩が、同級生をいじめている現場を発見し、それを助けるが、暴力を使ったため退部した。

このため運動神経だけは優れている。

・不良として悪名が立っているが事を荒立てることを嫌うので、周囲からは「ヘタレ」のレッテルを貼られ、

不用意な言動が原因で他者から痛い目に遭わされたり、いらぬ誤解をされることが多い。

しかし心身とも丈夫で立ち直りは早い。

・智也と明久とは幼稚園からの付き合い。

・元々黒の頭髪を染髪して金髪にしている。

鉄人によく注意されているが本人は直す気は無い。

・妹の芽衣に対しては普段邪険に扱っているが、大切に思っている。家族思い。

・異性に対する興味が旺盛で、魅力的な女子を見つけてはすぐナンパしたがる。

しかし成功した試しは今だなし。

・勉強は苦手だが、関心事に対する集中力には目を見張るところがある。

キャラ紹介（１）（後書き）

皆さんの感想お待ちしております。

入学式の朝

桜の季節の4月某日。

智也「…よしっ」

俺は鏡の前で自分の姿を確認する。
中学の制服の学ランとは違い、ブレザーを着た俺がそこに映っていた。

まだ着慣れない高校の制服だが、まあ其の内慣れるだろう。

智也「…しかし相変わらずの面だな…」

俺は顔にコンプレックスを抱えている。

顔というよりは『目』だな。俺は『ツリ目』なのだ。

さらに小学校のときに怪我をして左眉のところに傷が少しある。
なのでヤンキーと間違えられていたりする。

最初の頃は髪を伸ばして傷を隠していたが
鬱陶しいのもあり、今では何もしていないが……

智也「そうだ。明久に電話してみるか。」

なんとなくまだアイツ寝てそうだし」

俺は明久のことが気になり電話をかけてみる。

プルルルルル

ガチャ

明久「はい、もひもひ、吉井ですけど……」

智也「おはよう明久。今起きたみたいだな」

明久「ん？あれ？智也どうしたの？」

智也「いや、お前の事だから寝坊するんじゃないかと思ってな」

明久「え？つて、ええ！？もうこんな時間なの！？」

智也「ありがとう！電話もらってなきゃ寝坊するところだったよ」

智也「じゃあ、起きた事だし入学式の時ぐらいは遅刻するなよ」

……あとおそらくと思うが間違っても姉の制服着てくるなよ」

明久「そんな間違いするわけ……ナイジャナイカ」

智也「おい、今の間は何だ？しかも最後なんで棒読みなんだ？」

明久「えっと昨日準備していた制服が姉さんの制服だった……」

・
」

智也「さっそくじゃないか！？」

一応言っておくが俺達の制服はブレザーだからな」

明久「う、うん。ちゃんと確認してから着るよ」

智也「じゃあ、また学園でな。遅刻するなよ」

明久「うん。じゃあ、また学園で」

俺は電話をきる。

智也「さてっと、俺もそろそろ行くか。」

今日は高校の入学式だ

途中でコンビニに寄り、カフェオレとパンを買い、店を出ると…

タッタッタッタ

智也「ん？」

足音か…？ 音がする方に視線を向けると…

智也「平沢？」

視線の先には平沢がこちらに向かって走ってきていた。
そして俺に気付く事もなく通り過ぎて行った。

智也「どうしたんだあいつ？あんなに急いで」

時計でも見間違えて、遅刻だと思ったのか？まさかな。

……明久や陽一みたいなヤツはそうそういないよな。

学校に近付くにつれ、段々と学生の数が増えていく。
歩いていると校門に着いた。

そして同時に見知った人物も見つけた。

その見知った人物『平沢』は、ぼーっと突っ立って校舎を眺めていた。

周りの上級生や新入生はそんな彼女を一瞥し、過ぎ去って行く。

あんな場所（校門のど真ん中）に立っていられたら
皆の邪魔になるので声を掛ける事にした。

智也「おはよう平沢」

唯「ん？ あっ！トモ君！！おはよう！！」

声掛けるとこちらを向き、途端笑顔になる平沢。

智也「校舎見上げて何してたんだ？」

唯「いやあ？ 恥ずかしいんだけど時計、見間違えちゃって……」

智也「ん？ どういう事だ？」

ま、まさか……

唯「朝起きて時計みたときね、『遅刻だあ！』って
思っで急いで学校に向かったんだ」

智也「……」

唯「んで 学校に着いて時間確認したら、

『あれっ！？時間見間違えたぁ！？』って思っ
てぼーっとしてたんだぁ。いやっゝお恥ずかしい」

そう言って頭をかく平沢。

（マジか…まさかあの2人と同じようなヤツがいるとは）

唯「どうしたの？トモ君？」

俺が黙ったままだったので、顔を覗き込んでそう尋ねる平沢。

智也「気にするな。ちょっと考え事してたんだ」

唯「そうなんだぁ」

智也「クラス分け、もう発表されてるんだろ？さっさと見に行こ
うぜ」

唯「うん！ そうだね」

俺は平沢と一緒にクラス分けを見に行こうとすると

「……唯？」

と誰かが平沢を呼ぶ声がした。

唯「あっ！和ちゃん」

『和ちゃん』と呼ばれた平沢よりも短い髪に眼鏡をかけた女子が俺達に向かって歩いて来た。

智也「知り合いか？」

唯「うん！そうだよ！友達なんだ」

和「珍しいわね。唯が私より先に学校に来るなんて」

唯「いやゝはははは…ま、まあねゝ」

『時計を見間違えて早く来た』とは言えないよな。平沢は冷や汗をかきながら曖昧に返事をしている。

和「ねえ 唯、この人は？」

『和ちゃん』と言われる女性が俺の方を向き平沢に尋ねてきた。そりゃ当然の疑問だよな。

友達の横に見知らぬ人物が居ればそういう質問になるよな。しかも俺の見た目はヤンキーみたいだからな。

俺が自己紹介しようとする

和「もしかして、あなたがトモ君？」

智也「えっ！？」

何で俺の事知ってたんだ！？まさかエスパーか！？しかもトモ君呼ばわり！？やめて！恥ずかしいから！！

唯「うん！そくだよ、この人がトモ君だよ」

智也「ええっと和さんだっけ？なんで俺の事知ってるんだ？

それとトモ君はやめてくれ。かなり恥ずかしいから」

唯「ああゴメンなさい。唯から聞いてね。

『新しい友達が出来たんだ』って」

智也（なるほどな、平沢から伝わったわけか。）

そう思い、平沢に視線を向けると…

唯「えへへ」

と嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

そんな顔されるとこちらが照れるじゃないか

和「じゃあ自己紹介するわね。真鍋 和です 唯とは幼馴染みなのに」

唯「私達ずっと一緒なんだよ」

幼馴染みか、俺と明久、陽一みたいなもんか。

……いや あの陽一バカと一緒にされたら可哀相だな。

智也「俺の事は平沢から聞いてると思うが…

中川智也だ。これからよろしくな」

和「ええ、こちらこそよろしくね」

入学式の朝（後書き）

和ちゃん登場です！

皆さんの感想お待ちしています

入学式の朝　　バカ登場

俺達が互いに自己紹介を終えようとしたとき

陽一「そして俺が智也の親友の春原陽一！ヨロシク！」

朝からテンションの高いバカが出現した。

唯・和「わっ！！」

急に出てきたバカに驚く平沢と真鍋。

コイツは必要な時には出てこず、全く必要ない時に出て来るな……

智也「お前どつから湧いて出てきた？」

陽一「ヒドいな。人を虫みたいになんて傷つくじゃないか」

智也「いや、お前は虫じゃないだろ」

陽一「当たり前だ」

智也「お前と虫が一緒なんて虫が可哀想だろうが」

陽一「え！？ナニソレ。虫の心配！？俺虫以下なの！？」

智也「なに当たり前なこと言ってるんだよ」

陽一「当たり前なのか！？アナタヒドイよ！！」

智也「デケエ声出すな、うるせエしウザいキモイし」

陽一「そうさせたのアナタでしょうが!!」

楽しいか!? こんなこととして楽しいのか!?
ってキモいつてなんだよ!!」

智也「非常に楽しい。お前をからかうことが俺の生きがいだ」

陽一「最悪だア!!!! コイツ!!!!」

そう言つて頭を抱える虫以下の生物。

……ああ楽しいなあ。

さてコイツをからかうのはこれくらいにするか、
合格発表のとき同様、周囲からの視線が痛いし……

それに……

唯・和「……」

平沢と真鍋がポカンと口を開けていた。

和「……えーっとその人は?」

と真鍋から質問が来た。

智也「コイツは一応俺の……友達なのかな? いや、悪友か?」

陽一「一応ってなんだよ。しかも何故、疑問系だ…しかも悪友ってなんだよ」

未だに頭を抱えている陽一が先ほどとは真逆のテンションで
呟くように俺に言ってきた。

智也「そっちのほうが面白いからな」

陽一「アナタ、本当に最低ですよね」

智也（大丈夫。こんなことするのはお前だけだから）

あえて口にはしないが……

明久「智也！陽一！おはよう！」

そこで明久も合流した。

智也「おはよう俺の親友の明久」

陽一「って明久は親友で僕は悪友なのかよ」

智也「当たり前だろ」

陽一「コイツ本当に最低だ！！」

明久「ねえ智也？この人たちは？」

智也「ああ1人は明久も見たことあると思うが、

合格発表の日、一緒に見た見た平沢で、こちらは平沢の幼馴染の

真鍋だ」

明久「あ、初めまして吉井明久です。よろしくね」

唯「あつ私は平沢唯だよ」

和「真鍋和です」

明久とついでに陽一に自己紹介をする2人。
すると頭を抱えていた修司は立ち上がり。

陽一「春原陽一です！智也とは親友やってます！」

満面の笑みで本日二度目の自己紹介という快挙を成し遂げた。

唯「うん！よろしくね明久君、陽一君！」

和「よろしく」

陽一「ヨロシク！唯ちゃん、和ちゃん」

明久「よろしくね平沢さん、真鍋さん」

さつきはあんなにへこんでたというのにすぐさま元のテンションに戻る。

……切り替え早エな

しかも陽一はいきなり名前で呼んでるし……

唯「明久君と陽一君は、トモ君とはいつからの付き合いなの？」

おい、陽一のまえで『トモ君』って呼ぶなよ……
絶対このバカにからかわれる。

明久「僕と智也と陽一は幼稚園からの幼馴染なんだよ」

陽一「そうなんだよね」

唯「へ？ そうなんだ。私と和ちゃんも幼馴染なんだよ」

陽一「そうなんだ？」

智也（あれ？ 気付いてない？）

呑気に平沢と会話をする陽一。

コイツがバカでアホで良かった……

唯「そういえばトモ君と一緒にクラス分け見に行くんだった。せつかくだし皆で行こうよ」

智也「そうだな」

陽一「トモ君？」

げえ！？気づいた！？

唯「うんっ」「智也君」だから「トモ君」

陽一「トモ君……トモ君……クッ……クックッ……」

.....アッハッハハハハハハハハ！！！！
何？お前、唯ちゃんから『トモ君』って……ハッハッ！！

……って呼ばれてんの！？

アツハツハハハハハハハハハハ！！！！」

腹を抱えながら俺に指をさし、大笑いする陽一。

唯「？」

平沢は状況が分かってない様子。

智也「……………」

そして黙ったままの俺。

明久「陽一、そろそろ笑うのやめないと僕知らないよ」

陽一「アツハツハハハハハハ！！！！」

ヤベえ笑いすぎて腹イテエ」

そろそろ黙らせるか……………」

グッ

体の重心を少し落とし……

そして左足を軸足にし、右足を振りぬく！

智也「消し飛べ！！！！」

ドゴォン！！

陽一「あぶらッ！！！」

陽一の腹に蹴りをいれる。

3メートル近く吹っ飛びピクリとも動かなくなる陽一。

唯「えっ！？」

絶叫する平沢と

和「やり過ぎなんじゃないの？」

あくまで冷静な真鍋。

明久「だから言ったのに」

智也「大丈夫だろアイツなら。

……ほらいい加減クラス分け見に行こうぜ」

和「そうね…行くわよ、唯」

吹っ飛んだ陽一の方を眺めている平沢に声をかける真鍋。

『そうね』ってなかなかいい性格してるな、真鍋は…

唯「えっ！？陽一君はどうするの！？」

智也「1人になりたいんだって」

唯「う、うん…そうなんだ」

陽一をそのまま放置し、俺達はようやく、学校内へと歩き出した。

クラス分けの結果は

平沢と真鍋と同じクラスになった。

……ついでに陽一のヤツとも同じだが……。

明久とは別のクラスになってしまった。

1 - A

春原陽一・中川智也・平沢唯・真鍋和

1 - C

秋山澪・木下優子・霧島翔子・琴吹紬・田井中律・姫路瑞希

1 - D

木下秀吉・坂本雄二・島田美波・土屋康太・吉井明久

という風になった。（あいうえお順にて記載）

初日は簡単な自己紹介で終わった。

入学式の朝　　バカ登場　（後書き）

最後にバカテスメンバーとけいおん！のメンバーの1年次のクラス分けをしました。愛子は転校してくるのでいません。

皆さんの感想お待ちしております

雄二たちとの出会い(1)

〔1-Aの教室・放課後〕

入学して2週間が過ぎた。部活はまだ検討中……。

そんな事を考えていると真鍋たちの話し声が聞こえた。

和「唯、まだ部活に入ってないの？」

唯「何かしなくちゃいけないとは思ってるんだけど……。」

和「はあ…….こつやつて二ートが出来上がっていくのね……。」

智也「……さすがにオーバーじゃないか？」

つてかもしそうなら俺も二ートの一員ではないのか？

唯「トモ君は部活決めたの？」

智也「俺もまだ決めてない」

和「……アナタもなの？」

何その視線は…….そんな目で俺を見ないでくれ

智也「でもまあバスケ部にでも入ろうかなとは思ってるがな」

和「バスケ部に？」

智也「そう。だけどここってそこまでバスケ強くないから迷ってるんだよ」

和「確かにここのバスケ部が強いなんて聞かないわね」

智也「だろ。だからまだ検討中なんだ」

俺は話をきりあげると帰り支度を済ませる。

陽一のバカはどこかに行ってるから明久と帰るかな。

〈1 - Dの教室・放課後〉

雄二「やれやれ…… やってもないことに文句ばかり抜かしやがって」

雄二は中学の頃は悪鬼羅刹と呼ばれていて少し性格が悪い。

雄二は廊下を独りぐちる。

そして1人で帰り支度をすませていると、

雄二「つと、と……」

誰かの机にぶつかり中に入っていた教科書が落ちてしまった。

雄二「この時期からもうこのザマとは勉強熱心なヤツだな」

とりあえず雄二は落としてしまった教科書を拾おうと手を伸ばす。
そしてその惨状に気がついた。

雄二「・・・これは酷いものだな・・・」

そこには表紙は破れ、ページはぐちゃぐちゃになっていた。
新品で受け取ったばかりなので普通に使用していればまず是这样な
らない。

雄二はその教科書を拾い裏表紙を見ると

そこには『島田美波』と名前が書かれているのがわかった。

彼女はドイツからの帰国子女でまだ日本語が上手く言えないみたい
だった。

雄二「そういえばあいつ、初日にクラスの連中を『ブタ』呼ばわり
してたっけ」

おそらく本人は意味をよく理解せずに言ったのだろうが、
それに腹立てた連中がやったんだろっな・・・

雄二「・・・まあいいか。俺には関係のない事だ」

雄二はそれをしばらく観察してから、机の中に戻そうとする。

その時だった

雄二「っ!?!」

目の端に高速で動く何かが映った。

頭が判断する前に体が勝手に反応し、その場から大きく飛びのく。間一髪で回避が間に合い、目の前の誰かの拳が通過する。

この時点でようやく、誰かが俺に殴りかかってきた、ということを理解した。

雄二は体勢を立て直し、拳の主を見る。

そこには

明久「・・・・・・・・・・・・・・・・」

雄二とは入学初日から因縁のある人物だった。

雄二「どういっつもりだ、テメエ」

雄二は静かに明久に問いかける。

2人は互いを快く思っていなかった。

雄二は明久のバカさ加減が気に入らず、

明久は入学式の時、雄二がある女性に話しかけられても無視し続けたので、

理由を聞こうとして、入学式初日から騒ぎを起こしたりしている。

明久「……………なに……………やってんだよ……………」

雄二「それを聞きたいのはこっちのほう」

明久「オマエ、その子の席で何やってるんだって聞いているんだよ！」

いつものマヌケな姿からは想像つかないような怒鳴り声をあげる明久。

その視線は雄二の右手へと向いていた。

・・・・・・正しくは雄二の持つてるボロボロの教科書へと。

雄二の脳内では今の状況を整理していた。

雄二の右手のボロボロの教科書・無人の教室

校内に流れる雄二の風評・吉井の先ほどの台詞

それらから思い浮かぶ1つの結論。

雄二「・・・・ま、まさか・・・・・・おい待て吉井。俺は」

明久「歯を食いしばりやがれこのクズ野郎っ！」

雄二「チッ、このバカ野郎が・・・・・・！」

落ち着け！これは俺がやったわけじゃねえ！」

明久「ブチ殺す！」

雄二「人の話を聞きやがれ！」

明久は完全に雄二の話を聞いてない。

雄二「なら、ちよっくら相手してやらあ！」

と、雄二の言葉をかわきりに殴り合いが始まる。

明久「・・・・絶対に・・・・ぶっ飛ばす・・・・！」

雄二「しつげえな！まだやんのかよ！」

雄二は明久と殴りあいながら明久の事を考えていた。

雄二（なんでコイツは、諦めないんだ……？）

俺とコイツじゃ、どっちが強いなんて一目瞭然だろ）

雄二の思っている通り、雄二に比べ明久のほうが傷が多かった。

雄二「いい加減にしろ、クソバカ野郎が！」

雄二は明久と戦いながら小学校の頃の苦い思い出が蘇る。

明久「……可哀想……じゃなかよ……」

雄二「あア！？」

雄二は一瞬何を言っているのかわからず聞き返す。

明久「可哀想だと思わないのかよ！あの子は日本に来て

知り合いがいなくて、言葉がわからないのに、

それでも1人で頑張っているんだぞ！

どうしてそんな頑張っている子を虐めるんだよ！」

ボロボロのはずの明久は、力の籠もった声でそう言った。

雄二はそんな明久を見て前にも同じような状況を見ている気がした。

いや、違うか。俺はコイツと違って逃げようと考えた。

雄二は我が身が大事だった。

だが、明久は

明久「オマエみたいなヤツ許せるもんか！」

ガツン！ と一際大きな音が響いた。

明久は先ほどと比較にならないほどの勢いで吹き飛んだ。

そして雄二も明久の攻撃を食らい視界が揺らぐ

雄二「吉井！そんなに俺が気に入らないのならかかってきやがれ！

2度と立てないくらい殴ってやらあ！」

明久「言われるまでもない！オマエをぶっ飛ばして後悔させてやる
！」

雄二「ごちゃごちゃうるせえんだよ！この雑魚が！」

そしてお互いの拳が届く距離まで駆け寄ったところで

智也「そこまでだ！」 康太「……そこまで」

明久・雄二「っ！？」

突如2人の前に人影が入ってきた。

雄二の前には智也が拳を受け止め、康太は明久の目の前にペン先を
向けていた。

雄二「邪魔するな！テメエらには関係ないだろうが！」

康太「……それ以上暴れてもらっては困る」

智也「そうだ。コイツの言つとおりだ」

康太「……………カメラが壊れる」

3人「………はあ？」

康太の意味の分からない言葉に

雄二と明久だけではなく智也まで疑問符をあげる。

智也はてつきり2人の喧嘩を止める為に手伝ってくれたものかと思つていたのだ。

康太はそういうと教室のスミに行きゴソゴソと何かを取り出した。

……あれはCCDカメラか？でもなんであんな所に？

智也「……………まさか盗撮か？」

康太「……………っ！（ブンブンブン）」

康太はすごい勢いで否定している。

雄二「……………けっ。なんだか気が削がれちゃった。命拾いしたな吉井」

雄二はそう言つと鞆を肩に担ぎ明久に背を向ける。

明久「待てよこの野郎！」

雄二「ぐがつ！」

明久は帰ろうとする雄二の肩を掴んで殴りつける。

智也「おい！明久落ち着けよ」

雄二「……………まだ続けたいようだな吉井」

再び一食触発の雰囲気にかわる。

智也「おい、お前らいい加減に」

俺が2人をとめようとする

???「キサマら、何をやっとするかつ！」

3人「「「っ！」」」

突如野太い声に阻まれた。

秀吉「どうじゃ？頭は冷えたかの？」

そこには女顔で爺言葉を使う同級生。木下秀吉がいた。

智也「今の声もしかしてオマエか？」

秀吉「どうじゃ？似ておったかの」

一時は秀吉に氣をとられていると明久が雄二に殴りかかるうとしていた。

明久「離れて木下さんっ！くたばれ、この」

雄二「けっ、ホントにしつこい野郎だ」

智也「お互いいい加減にしとけよ」

ダン!!

俺は2人に前に出て2人の手を掴み床へと叩きつけた。

智也「さっきから言ってるよな。やめろって。ってかなんだこの状況は。」

ここが騒がしいから覗いてみたら2人が殴り合ってるし」

明久「智也止めないで！僕はこの外道をブチのめさないとイケないから」

雄二「けっ、できるもんならやってみやがれ」

智也「なんだ2人とも、まだやる気なのか？」

それなら俺も本気でやらせてもらうが？」

秀吉「まったく……。理由は知らんが、

教室でコレ以上暴れられるのはワシもクラスメイトとして見逃せん。

事情を聞かせて貰えんじやろうか」

明久・雄二「フンっ！」

智也「すまないな……。えっと……」

秀吉「ワシは木下秀吉じゃ」

康太「…………土屋康太」

智也「ああ、木下と土屋か。俺は中川智也だ。

こいつ等を止めるのを手伝ってくれてありがとう」

秀吉「よいのじゃ。クラスメイトじゃからのう」

康太「……………自分のためだ」

智也「で、何が原因なんだ？」

だが、2人は何も喋ろうとしなかった。

秀吉「やれやれ参ったのう」

智也「これじゃあサッパリわからないぞ」

康太「……………（スツ）」

智也「ん？何だこれは」

康太「……………見るといい」

そんな中、康太はカメラをいじり動画を見せてくれた。

秀吉「……………脚しか映っておらぬが？」

智也「……………土屋。やっぱり盗撮を」

康太「・・・・・・・・（ブンブンブン）」

物凄い勢いで否定する康太。

2人も不満気であるが動画を見ることにした。

雄二たちとの出会い（2）

その後、動画を見ていくと放課後教室の掃除をしている時に島田の教科書が落ちてしまい、掃除している人たちは話に夢中で気づいていなく、気づいた頃にはすでにボロボロの状況だった。

康太「……………これが真相」

康太が画面を操作して画面を消すと、

明久「ごごごごごごご、ごめんなさいっ！」

明久が突然雄二に深々と頭を下げ謝りだした。

雄二「なんだ、いきなり」

明久「その、もう、なんてお詫びしていいか……………！
とにかく坂本君気がすむまで僕を殴って」

雄二「いや。もうお前を殴る場所ねえし」

明久「あ、そつか。えっと、それなら」

智也「どうしたんだ明久。突然？」

明久「あ、うん。実は」

つまり明久は雄二が島田の教科書をボロボロししたと勘違いして

この惨状が出来上がったわけだ。

秀吉「しかし、坂本も坂本じゃな。きちんと説明したら良かったものを。」

あの様子じゃと説明しておらぬようじゃのう

雄二「…………ふん！」

秀吉「何か事情があったのかのう？」

雄二「お前には言ってもわからねえよ木下。

んじゃ、用事が済んだから俺は帰るぞ」

明久「あ、うん。また明日、坂本君。それと、本当にゴメン」

雄二「けっ」

雄二は明久に背を向け再び鞆を肩に担ぐ。

明久「ねえ智也、木下さん。新品の教科書って

どこに行けばもらえるか知ってる？」

智也「新品の教科書か……………」

秀吉「うん？いや、ワシは全然知らんが」

智也「明久。言っておくが秀吉は男だぞ」

明久「え？」

智也「いや、普通わかるだろ？」

秀吉「中川おぬしはワシが男じゃとわかるのか？」

智也「はあ？当たり前だろ」

秀吉「よ、良かったのじゃ。」

皆、ワシのこと女子じゃと勘違いしておってのう」

智也「大変なんだな木下も。それより教科書だ。土屋はわかるか？」

康太「……………（フルフル）」

明久「そっか」。購買には売ってないかな？」

智也「購買には売ってないかもな。」

もしあったとしてもこの時間だともう閉まってるぞ」

明久「ならコピーして」

秀吉「何枚コピーするつもりじゃ……………」

康太「……………そもそもきちんとした教科書にならない」

明久「じゃあ、アイロンをかけるとか」

智也「服じゃないんだから無理だろ」

明久「僕の教科書と入れ替えるとか」

秀吉「配布された日に全員名前を書いたじやろつが。

お主の名前が残っておつては入れ変えられんぞ」

康太「……………根本的に解決していない」

明久「連帯責任で皆の教科書もボロボロにする」

秀吉「確かに島田の教科書は目立たなくなるかもしれんが……………」

智也「迷惑だろ」

明久「じゃあじゃあ」

雄二「あーもうっ！頭悪いなテメエラは！

んなもん教師に説明すればいいだろうが」

明久「あ、そつか。悪い事してるわけじゃないもんね」

秀吉「そういえばそうじゃな。坂本よ。よく教えてくれたのう」

康太「……………盲点だった」

智也「さすが坂本。優しいな（ニヤニヤ）」

雄二（コイツ最初から気づいてやがったな）

明久「あ、坂本君ありがとう。助かったよ」

雄二「……………」

坂本が教室から出ようと扉に手をかけると

西村「待て、坂本。ここで何をしている」

皆「「「「「っ！？」」「」」」」

明久「筋肉教師・・・・・・・・」

西村「西村先生と呼ぶ」

やばいな。今の状況は。

今の教室の状況に明久と雄二の傷跡がある。言い逃れはできない。

明久「先生すみませんっ」

西村「むおっ！？」

そこで明久が上着を脱いで筋肉教師の顔にかぶせる

康太「・・・・・・・・失礼」

さらに康太がどこから取り出したケーブルを上着の上から巻きつけ簡単に取れないようにする。

秀吉「今のうちにこっちからにげるのじゃー！」

木下が窓を開けそいう。

が、それは嘘だ。明久たちは扉から脱出し、身を隠す。

俺は囹役をかい、窓から地上に着地し、逃げる。

西村「待て、貴様ら！逃がさんぞ」

筋肉教師はまんまと策にひっかかり俺を追いかける。

俺はそのまま筋肉教師から逃げつけたが、体力が持たずにつかまっていた。

その後、結局明久たちも捕まったが教科書はなんとかあったみたいだ。

あの後教師が誤って新品の教科書を廃品回収にだしてしまったので、それを明久と雄二が回収車を追いかけなんとか追いついて教科書を手に入れたみたいだ。

その件もあり明久と雄二は仲が良くなり、名前で呼び合うようになった。

もちろん、協力してくれた秀吉や康太。俺とも仲が良くなり名前で呼び合う仲になった。

雄二たちとの出会い（2）（後書き）

今回は雄二たちを登場させました。

長文になったため、2話構成で描いています。

皆さんの感想お待ちしております。

軽音部って何かな？

〽後日、Dクラス〽

午前の休憩時間

雄二「おい、明久Bクラスのやつらが購買のパンをかけて
バスケやらないかって言ってるがどうする？」

明久「パン！やるやる。今月は食費がヤバかったんだから助かる
よ」

雄二「ならメンバー集めるか」

康太「……………手伝う」

秀吉「ワシも参加させてもらおうかの。なにやら楽しそうじゃ」

明久「なら僕は智也に声掛けてくるよ」

雄二「ああ、今日の昼休みだからな」

〽Aクラス〽

俺は陽一と話をしていた。

智也「そついえば陽一は部活にかするのか？」

陽一「ん？あー俺は帰宅部だね。いい女探しに行くからな」

智也（あー。コイツらしい理由だな）

陽一「そういうお前は？」

智也「まだ考え中だ。まあそろそろ決めないと」

陽一「まあ智也は頭もいいし、運動も出来るし、音楽も出来るからな。」

でもバスケットでもするのか？」

智也「まあやるなら自分の好きなことしたいからな」

俺と陽一が話していると明久がやってきた。

明久「ねえ智也。今日の昼休み、Bクラスの人たちと購買部のパンをかけてバスケットしない？」

智也「ああ、いいな。乗った。雄二たちもやるんだろ」

明久「うん。あ、陽一もどう？」

陽一「もちろん。僕もやるよ」

明久「じゃあ今日の昼休み体育館だよ」

俺達が会話をしていると今度は平沢が話に入ってきた。

唯「ねえトモ君、軽音部って何かな？」

智也・明久「「軽音部？」」

なんでいきなり軽音部なんだ？

唯「私ね、軽音部に入部したんだけど何するのかよく分かんないんだあ」

智也「何するのか分からないのに入部するなよ

…てか軽音部っていったら…ギター弾いたり、ベース弾いたりして、

バンドとか組んだりするところだろ」

陽一「へえ」

唯「えっ ギター…？ バンド…？」

そんな単語がでてくるとは思わなかったみたいな顔をする平沢。そして陽一お前も知らなかったのか？

唯「ええ！？そうなの！？私、軽い音楽って書くからてっきり

簡単なことしかとやらないと思ったのに…」

智也「簡単なことってなんだよ？」

唯「口笛とか…」

智也「なんだそのやる気のでない部活」

明久「そうだね」

唯「和ちゃんにも言われた…」

口笛をする部活ってなんだよ…かなりシユールだな。

和「じゃあ 何なら弾けるの？」

俺達の会話を聞いていた真鍋が平沢にそう聞いてきた。

唯「ん？……………カ、カスタネット…」

和「…すごく似合うわ…」

智也「……………同感」

陽「カスタネットが凄いな唯ちゃんは」

明久「陽……………」

なんか1人変な事言ってるがスルーするか

キーン コーン カーン コーン…

休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴る。

唯「どうしよう和ちゃん？…」

和「どうしようって言われても…」

智也「大変だな真鍋も……」

平沢は真鍋に泣き付いていた…

明久「じゃあ昼休みに」

智也「おう」

昼休みのバスケットはもちろん俺達が勝っておごって貰った。

入部

放課後になり明久が俺を待つてる間に、帰りの支度をしていると…

唯「あの〜トモ君、アキ君」

智也「ん？」

明久「え？」

平沢に呼び止められた。

つてかもうつも君言われるのには慣れた。というかもうつあきらめた。それに何故か明久もアキ君言われてるし

唯「あのね…お願いがあるんだけど…」

智也「……………どうしたんだ？」

明久「何かあったの？」

唯「えつとね……………軽音部の部室に一緒に行ってもらえないかな？」

今まで俯いていた顔を上げそんなことを言う平沢。

智也「なんで？」

…まあ理由は想像つくけど。

唯「それは、軽音部に辞めますって言いたいんだけど

…1人じゃ心細いし、軽音部に怖い人がいたら恐いし…」

…やっぱりか…

智也「何で俺たちなんだ？別に悪くないが真鍋に頼めばいいじゃないのか？」

唯「…和ちゃん、生徒会があるからって断られちゃった…」

お願いだよ！？トモ君とアキ君しか頼れる人いないんだよ！」

そう言っただけに泣きながら抱き付いてくる平沢。

智也「って、なんで抱きついて来るんだ！？ひとまず離れろ」

唯「やだっ！一緒に行ってくれなきゃ離さないッ！」

早いとこ、この状況をなんとかしなければならぬ。
なぜなら、周囲からの視線が痛いからだ。

俺に泣きながら抱き付く平沢。

その平沢を引き剥がそうとする俺。

更に平沢が「見捨てないで」だの「1人はイヤだ」なんて言うもんだから…

女子A「中川君、平沢さんに何したの？」

女子B「平沢さんかわいそう…泣いてるよ…」

という、俺がまるで悪人の様な誤解をあたえてしまっている…
これ以上「離せ」「イヤだ」の押問答を続けるわけにもいかない。

それに女子に抱き疲れるなんて今までなかったから恥ずかしい。

智也「ってか誰も行かないなんて言っていないだろ。

良いよ。一緒に行つてやるよ」

唯「本当に!？」

明久「優しいね智也は。平沢さん、僕も一緒に行くよ」

先ほどのまでの泣顔が嘘の様に途端に笑顔になる。

唯「ありがと、トモ君!アキ君」

俺は泣き止んだ平沢を連れて明久とともに
軽音部の部室である音楽室へと向かった。

〈音楽室前〉

階段を上つて、ようやく音楽室に着いた。

ん?平沢が震えてる?もしかして緊張してるのか

そこで後ろから声がかかる。

律「あなたが平沢唯さん?」

唯「はあゝびつくりしたあゝ。あ、はい。そうです。」

律「はあゝゝ ムギ、お茶の準備だ！」

いやあゝ、入部希望者が3人も来てくれるなんて」

え・・・3人ってことは・・・俺と明久も入ってるのか？

智也「いや、俺は・・・」

明久「え？僕は・・・」

律「さあ、入った入った！！！」

智也「おゝい・・・」

明久「え？え？」

ゝ音楽室ゝ

漣「軽音部へようこそ！」

紬「お待ちしてました」

智也「はあ」

紬「さあ、召し上がって」

目の前には高級そうな紅茶とお菓子が置いてある。
凄い美味しそうなんだが……

唯「わあゝ凄くおいしそう

明久「本当だ美味しそう」

完全に本来の目的を忘れてるよこの人。しかも明久まで。
しかも2人とも幸せそうな顔でケーキを頬張っているし…

智也「はあ…」

すると部長らしき人物が…

律「食べないの？」

と聞いてきた

紬「もしかして甘いもの苦手だったかしら…？」

といかにもお嬢様みたいな女子が申し訳なさそうな顔をしていた…
そんな顔されたら食べないわけにもいかず…

智也「いや、ちょっと考え事してたんだ。

甘いものは好きだし。じゃあいただきます」

と1口ケーキを口の中に入れると。

智也「…うまつ」

思わず声が出てしまった。そこら辺のケーキ屋より遥かに美味い。
ケーキは結構食べてるほうだがこれはかなり美味しかった。

律「そうだろ？ムギの用意するケーキは美味いんだぜ！」

紬「いえ そんな…」

何故か威張る部長らしき女子と、謙遜する『ムギ』と呼ばれる女子。

漣「平沢さんと…えつと…」

黒髪の子が俺の方を見て困った顔をしていた。

智也「ああ、俺の名前は中川だ」

明久「僕は吉井だよ」

漣「あつ…うんっ」

俺の名前が分からなかったんだろっから教えると、黒髪の子はどこかホッとしたような顔をした。

漣「平沢さんと中川君に吉井君はどんな音楽やりたいの？」

改めて黒髪女子が聞いてきた。

唯「えっ!？」

吉井「あつ」

智也「あゝ…」

平沢は今まで食べていたケーキから目を離し驚いた声を出した。
明久も今頃目的を思い出したみたいだ。

智也「とても言いにくいんだが。俺達は入部しにきたわけじゃないからな。」

それにコイツも実はギター弾けないから退部しにきたんだ」

律「えええ!!! そうなのか!?

待つて、あと1人入部しないと廃部になっちゃうんだよ!!!」

智也「マジで!?!」

俺、そんなこと聞いてないぞ。

律「うん、マジで!?!」

明久「どうしよう智也」

智也「そういつてもな……」

律「そんなこと言わずにせめて演奏だけでも聴いてってよ!」

智也「平沢いいか?」

唯「うん!」

智也「じゃあ。聴かせてもらってもいいか?」

律「もちろん!」

そして俺と明久、平沢は演奏を聴いてみた。

翼をくださいのロックverか。

にしても、なんだろうこの感覚は・・・新鮮だな。

演奏自体は正直言つとあまりうまくないけど心に響く演奏だったな。

唯「あんまり、うまくないですね！」

平沢が思ったことをそのまんま口にした。

律「ばつさりだー！」

明久「言っちゃったよ」

唯「でも、私、この部に入部します！軽音部に！」

智也「良いのか？」

唯「皆さんなんだかすつごく楽しそうでした！

だから私この部に入部します！！」

律・澪・紬「「「やったー」」」
「「「」」」

智也「まあそれでいいなら俺はいいが…

じゃあ俺は帰るとするかな。もう用事は済んだし。

ケーキご馳走様でした」

明久「じゃあ僕も」

俺と明久は席を立ち帰ろうとすると

唯「え？トモ君もアキ君も一緒に軽音部入ろうよ。
確かまだ部活入っていないんだよね」

智也「まあ、まだ部活は決めてないが……」

明久「うん、僕もだけど……」

そこで部長らしき女子の目がキラリと光る。

律「なら、軽音部に入ろうぜ」

智也「え？い、いや。俺は……」

明久「え？」

唯「そうだよ！トモ君もアキ君も一緒に入ろうよ」

律「そうだ！そうだ！一緒にやろうよ！！」

今なら『副部長』のポジションが空いてるから！」

そんなポジションは正直いらない

智也「……なんで俺たちを誘うんだ？

平沢が入部したんだから廃部することは
なくなっただけじゃないのか？」

その疑問をぶつけると……

律「理由は簡単だ！人数増えた方が、演奏の幅が広がるからな！

…あと部費も増えるし…」

おい、今本音が聞こえたぞ

唯「私はトモ君とアキ君と一緒にやりたいな！」

律「漣とムギも入って欲しいよな??」

黒髪女子とムギに聞く部長らしき女子。

紬「ええっ もちろん!!」

漣「元々、入部希望者だと思ってたしな断る理由はないよ」

あれ? 歓迎ムード?

律「ほらほら2人もこう言ってるんだからさ」

唯「そうだよトモ君! アキ君!」

智也「……」

明久「……」

そうだな。このまま何もせずグダグダするより、1度入ってみるか。
気に入らなかつたらやめればいいだけだしな。

……それにケーキおいしかったしな。

智也「わかった。入部するよ」

明久「僕も入るよ」

律「本当か!？」

智也「ああ、本当だ」

明久「うん、本当だよ」

律・唯「やったーっ!」

漣「これで本当に6人目獲得だな!」

紬「はいっ!」

智也「……」

明久「……なんか照れるね／＼」

俺たちが入部するだけで、こんなに喜ぶ彼女達。なんつか…悪い気はしないな…照れくさいけど。

律「そういえば…えっと…名前なんだっけ?」

智也「ああ、ちゃんとした自己紹介はまだだったな。

俺は中川智也だ。これからよろしく頼む」

明久「僕は吉井明久だよ。よろしくね」

律「智也と明久か。じゃあトモとアキだな。

トモとアキは何か楽器できるのか?」

智也「俺はギターかベースなら出来るぞ」

明久「僕はキーボードなら」

律「マジで！凄いの入ってきたよ！」

唯「すごい、2人とも！弾けるんだ！」

智也「親が昔バンド組んでいてな。一通り教えてもらったんだ」

明久「僕は母親に教えてもらったことがあるんだ」

澪「それでも凄いな」

唯「あ…でも私、全然楽器出来ないし…」

あつ「マネージャーとかどうかな!？」

智也「いや…運動部じゃないんだし…マネージャーは……」

紬「そうだ!」

俺達との会話から何やら思い付いたらしい『ムギ』が、
こんな提案を俺と平沢にしてきた。

紬「中川君ってギターできるのよね？」

智也「まあ、ある程度は」

紬「なら、中川君が平沢さんにギターを

教えてあげたらよろしいのではないのでしょうか？」

律「それはいい案だなムギ」

智也「え？俺が？いや、無理だろ」

律「大丈夫さ。自分を信じろ。ってか部長命令」

智也「理不尽な」

明久「智也ならできるよ」

唯「よろしくお願いします師匠！」

智也「はあ」

俺は済し崩しに平沢にギターを教える事になった。

軽音部での日々1

〽後日・教室〽

和「へえ〽、唯って軽音部に入ったんだ〽」

唯「私、ギター弾くんだよ〽」

和「え？唯ギター弾けないでしょ？」

唯「うん、弾けないよ〽。でもねトモ君が教えてくれるんだ〽」

和「中川君ギター弾けるの？」

智也「まあたしなむ程度は」

和「大変でしょうけど頑張ってるね」

智也「……ああ」

〽音楽室・放課後〽

唯「うん、おいしい。」

明久「本当においしいね。僕のカロリーが満たされていくよ」

明久その言葉にお前の命が危ない気がするんだが……

智也「本当においしいな……って練習……」

……いや、その前に平沢ギターは？」

普通にケーキ食べてる場合じゃなかった。

唯「へっ？」

律「じゃあ、今週の日曜にギター見に行くか！」

智也「それがいいだろうな。それがないと練習もできないしな」

唯「ねえ、トモ君のギター見せて！」

智也「ああ。これだ」

漣「ESPホライゾン!？」

智也「ああ」

漣「へえ、凄くいいギター持つてるんだな！」

智也「あ、ああ。秋山……近い……」

漣「ご、ごめん／＼／＼」

紬「漣ちゃん……中川君……」

唯「ムギちゃん……？」

律「なあトモ！なんか、弾いてみてくれよ！」

紬「私も中川君のギター聴きたい！」

明久「僕も聴きたい」

智也「別に良いけど……あまり期待するなよ」

俺はギターを担ぎ、1曲演奏する。

紬「中川君すごい」

唯「本当に凄いねトモ君」

明久「智也は本当に凄いね」

漣「さすがは、中川……智也……だな／＼」

恥ずかしいなら名前で良いのに。ってか名前を呼んだだけで顔赤くなるのか？

そりゃ少し恥ずかしいかもしれないけどそこまで？

ちよつと聞いてみるか……

智也「なあ田井中？」

律「なに？てか『律』で良いって言ってんじゃん」

昨日、俺と平沢は改めて自己紹介をし、その時に田井中が俺の事を『トモ』と呼びだした。

それを聞いた平沢が『トモ君のほうが良い』なんて事言ってたが
まあ呼び名なんて今さらどうでも良いが………
もう平沢であきらめた。大丈夫。俺が慣れれば言いだけの事だ！

で、その折りに平沢と田井中が『名前で呼べ』と言ってきたが
さすがに女子の名前を呼び捨てで呼ぶのは少し抵抗がある。
だから、今は苗字で呼んでいるのだが………

智也「まあ気にしないでくれ。それよりちょっといいか？」

律「結構重要なんだけどな……」

手招きすると愚痴りながらも俺のそばに来た
田井中に秋山に聞えないように小声で話す。

智也「（昨日から思っていたんだが秋山って

もしかすると人見知りとかするタイプか？）」

律「（ん？ああ　するよ。それに今なら人見知りだけじゃなく、
恥ずかしがり屋、寂しがり屋、怖いものはダメ、
負けず嫌いという4点セット付きだ）」

智也「（…なんだよ『今ならお買い得』みたいな言い方は…）」

なるほど、そんな性格してたんじゃ昨日あったヤツの
名前を呼ぶだけで赤面するわけだ。しかも俺男性だし。

チラッと秋山を見てみると…

漣「…？」

『何の話をしてるんだ』と言わんばかりの表情をしていた。

律「（それに…）」

智也「（ん？）」

律「（トモが不機嫌そうな顔してるからじゃないのか？）」

若干ニヤけながらそんな事を言ってくる。

智也「（昨日も言ったがこの目は生まれつきだ！

傷は小学校の時に出来たんだ！

俺だって・・・俺だって・・・こんな顔・・・）」

律「ちよっ！？ひとまず落ち着けトモ」

智也「これが落ち着いてられるか！？」

律「もし生まれつきだとしてもそんな顔してたら

相手に誤解されるよな？という事で笑ってみましょう！さあ笑うんだ！」

そう言っただけの頬に手を伸ばし無理矢理笑わせようと引っ張る。

グニッ

智也「コラ…何する」

漣「律ッ？」

律「笑顔の練習だよん」

んなことを笑顔で言ってくる田井中。

そして急に俺の頬を引っ張り出した田井中に困惑の声をあげる秋山。

とりあえずやらねばなしは性に合わないので反撃に出る事に。

グイッ

智也「田井中こそ少しは女らしくしたらどうだ？…この口調とかな」

そつ言い田井中の頬を引っ張る俺。

漣「中川君ッ？」

律「にやにおうー！このツリ目！」

智也「カチューシャ」

律「ヤンキー」

智也「俺はヤンキーじゃねえ！」

お互いの頬を引っ張り合いながら口論？する俺達。

…と

漣「…クスッ あはは！」

笑い声が聞えてきた。

漣「あはははっ！」

智也「ん？」

律「…漣？」

漣「ご、ゴメン…なんだか2人がおかしくって…あははっ！」

目に涙を浮かべながら俺達を見て笑う秋山。…ツボに入ったようだ。

智也（…笑うと可愛いな）

初めて秋山の笑顔を見た。

律「全くトモのせいで漣に笑われたじゃないか」

同じく笑いながらそんな事を言う田井中。

智也（…いや 先に仕掛けたのお前だろ）

そう思ったが口に出さなかった。

せっかく秋山が笑ってんだそれはヤボだな。

そして今度の日曜日、皆で平沢のギターを買いに行く事になった。

軽音部での買い物

「待ち合わせの商店街」

休日の街を1人で待っている。

今日は平沢のギターを購入するために、

軽音部員と待ち合わせしているためである。

まだ時間があるので音楽を聴きながら待つことにした。

数十分待つこと

全員揃ったので楽器店に向かうため俺達は商店街を歩いていた。

ちなみに女性陣は横一列で歩いており、

俺と明久はその列後ろで歩いている。

何故かって？そりゃ恥ずかしいからだよ。

女子4人に対し男2人だぜ！

しかも中学時代女子と買い物なんて行った事ないから恥ずかしいし。

紬「お金は大丈夫だった？」

唯「うん。お母さんに無理言って5万円前借りさせてもらったんだ」

智也（それだけあれば何とかなるな）

琴吹と平沢の会話が聞えてきたので、俺がそんな事を考えていると…

唯「ちょっと見るだけ」

平沢の声が聞えた。

智也（何だ？）

明久「どうしたんだろ？」

とある洋服店に突入する平沢。

呆れながらもちゃっかり付いて行く田井中。

笑顔で洋服店に足を運ぶ琴吹。

その場に残る秋山。

こんな状況だった。

智也「なあ 秋山？」

漣「何：中川？」

智也「帰っていい？」

漣「ゴメンそれだけは勘弁して……」

秋山は涙目になりながら懇願してくる

智也「冗談だ」

とりあえず突っ立ってる訳にもいけないので…

智也「とりあえずアイツ等の事頼んでいいか？

俺はその本屋にいるから」

漣「え？行かないの？」

智也「いや、だって、あそこは女性の服を扱う店だろ。

男子の俺らはさすがに入りにくいし……だから、頼む秋山。
そこは察して欲しい」

漣「そうだな。わかった。すぐに連れてくるから」

智也「…了解」

そう返事し、秋山は平沢達の後を追ひ、俺と明久は…本屋に向かった。

おそらく秋山の性格上すぐって言うのは無理だろうしな。

………

本屋で新刊のチェックをし、音楽雑誌と漫画を立ち読みしていたら…

漣「お待たせ…」

申し訳なさそうな顔をした秋山がやって来た。

智也「ああ、大丈夫。ひとまずお疲れさま」

ボタンと雑誌を閉じながら答える。

智也「さあ 行こうぜ」

漣「うん……」

明久「お疲れさま秋山さん」

今度こそ楽器店へ……………

……………が、その後も平沢と田井中、便乗する琴吹に振り回され、

雑貨店、デパ地下、ゲーセン等々……………最終的には秋山も楽しんでいた。

まあ俺も明久も楽しんでいただけ。

今度は休憩のため、喫茶店に入店する俺達。

……………

唯「はあゝ疲れたゝ」

律「へへゝ買ったちったゝ」

紬「楽しかったですねゝ」

口々に言う面々。更に…

唯「次どこ行こつかゝ？」

明久「どこがいいかな？」

平沢が目的地は1つしかないのにそんなこと言う。

なので…

智也・漣「楽器だ 楽器」

と、俺と秋山の声が重なる。それを聞いた平沢は…

唯「あっそうか 何か忘れてると思ってたら…ギターだ」

智也「おい、お前ら寄り道しすぎなんだ」

流石にツツコまざるを得ない。

律「でも、智也だって楽しんでたじゃないか。
その手荷物見ても説得力ないぞ」

智也「うつ……」

俺の隣にはゲーセンでとったぬいぐるみなどが入った袋が置かれてあった。

いや、だってゲーセン行ったんだぞ。

ブツとらないと……しかも今日は運よく結構取れたし。

…紆余曲折ありながらもようやく本来の目的地に向かうことに…

〈10GIA〉

漣「女の子ならネックが細いやつがいいぞ」

唯「あ、このギターかわいい」

智也（聞いてないな・・・）

明久「それ、25万するよ」

唯「さすがに手が出せないや・・・」

智也「向こうに安いやつがあるぞ。」

ストラトとかテレキャス系とか色々・・・」

智也（動く気配なしだな・・・）

紬「そのギターが欲しいの？」

唯「うん・・・・・・・・」

漣「私も、あのベースが欲しかった時こんな感じだったな。」

回想からすると、何か秋山のは違う気がするような・・・・・・・・・・。

律「私も、あのドラム買うために

値切って値切って・・・・・・・・・・」

店員さんの涙が眼に浮かぶ・・・・・・・・・・

漣「店員さん、泣いてたぞ。」

やっぱりな。

紬「あゝ、値切るって？」

律「欲しい物を手に入れるためにマケてもらったことさ！」

そこはドヤ顔するところなのか？

紬「何か、懂れます」

智也「いや、懂れるか？」

律「じゃあ、みんなでバイトするか！」

漣「バイトってどんなのするんだろ……………」

〈音楽室〉

律「うん、じゃ、ティッシュ配りとか？」

漣「……………無理そう…………。」

明久「ファーストフードとかは？」

漣「それも、無理そう…………。」

智也「じゃあ、これならどうだ？」

唯「交通量調査のバイト？」

智也「これなら日給もそこそ良いし、

短期バイトだから部活にも影響しないだろうしな」

漣「うん、これなら大丈夫！」

こうして、何のバイトするかは決まった。

軽音部での買い物（後書き）

少し皆さんにお聞きしたいのですが

バカテスキャラとけいおんキャラのカップリングですが、
どのカップリングがいいなとか希望はありますか？

これはまだカップリングを決めていないので

その参考にしたいと思っています。

また、その時ハーレムありにすべきかも悩んでいます。

その件も含めて感想をいただけると嬉しいです。

アルバイト

〈教室〉

和「バイト？」

唯「うんっ！ギター買ったために！軽音部のみんなも協力してくれるんだ」

和「え！？みんなを巻き込んで！？」

唯「うんっ」

和「じゃあ…中川君も？」

唯「？…そうだよ、トモ君も」

和「そうなんだ…意外…」

智也「ん？どうしたんだ真鍋？俺のこと見て？」

何か俺の顔についてるのか？」

和「いや…中川君が唯のためにバイトするって少し意外だなんて思ってた」

智也「そうか？」

和「中川君ってなんだかめんどくさがりな感じがしたから…」

智也「失礼だな…」

そりゃ確かに少しはそうだがそこまで言われる筋合いはないぞ。

智也「まあ、今は軽音部のメンバーだからな。

メンバーが困ってるんだから手伝わないとな。

それに俺は平沢にギター教えないといけないんだから
頼まれたことはちゃんとやらないとな」

和「クスッ、そうなんだ。じゃあいつか私も何か頼もうかしら」

智也「・・・俺に出来る事なら」

唯「トモ君は優しいからね」

陽一「そうなんだよ智也は優しいからね」

と、平沢と……

智也「…誰だっけお前？」

陽一「お前の親友の春原陽一！！親友の名前忘れるなよ！！」

智也「え？親友？誰ソレ？」

陽一「……」

…ん？ 黙った…？

いつもなら騒音問題レベルの声で反論してくるのに…

陽一「ふう？」

と息を吐き『やれやれ』と手を上げ首を左右に動かす陽一。
…何だコイツ？

陽一「こうゆうところが素直じゃないんだよな？

良いかい？唯ちゃん、和ちゃん。

コイツはあんな事言ってるけど、照れくさいだけなんだよ」

智也「……」

唯「うんうん」

和「若干そんな気はするわね」

陽一「でしょ？つまり智也は……」

そこで俺を指差して

陽一「ツンデ」

智也「うせろっ！！」

シユダダダダダダッダダダダッ！！

176 HIT

俺は瞬時に陽一の懐に入り込み、CLNNADの智代並に蹴りを叩き込む。

陽一「ウゴア！！！」

智也「誰が何だって？もう一度言ってみろ」

口を押え悶え苦しむアホにすこみを利かせる。
するとアホは…

陽一「…ッ、ツンデレ…」

シュダダダダダダダッダダダダッ！！

296 HIT

俺は再びを陽一に向けて蹴りを繰り出し黙らせた。

陽一「ウベエ！！」

智也「黙ったか」

唯「陽一君が死んじゃった？！！」

和「多分大丈夫よ」

慌てる平沢とやはりどこか冷静な真鍋。
ちなみに真鍋の言う通りだな。

コイツはG並みの生命力を誇るからな。

智也「あつ、そうだ。俺このバカに用事があったんだ」

唯「なんの用事？」

智也「今度のバイトこいつにも手伝わせようと思ってな。

まあコイツならバイトの日当日に呼び出しても大丈夫か」

「バイト当日・とある道路前」

週末の休日。

集合場所に集った俺は

スタッフから預かっていたカウンターを皆に配る。

智也「じゃあ4人は2人ずつのペアで

1時間ごとに交代しながらやってくれ」

漣「え？中川と吉井はどうするんだ？」

智也「俺と明久は別の場所でやるから。

それにスケッチ呼んでるから大丈夫だ」

唯「それって陽一君のこと」

智也「そうだ。じゃあしつかりやれよ。

秋山大変だろうけど頑張つてな。何かあれば俺に連絡してくれ」

漣「ああ、わかった」

俺はこの場所を4人に任せ、別の場所へと向かう。

陽一「ねえ？なんで僕がここにいるわけ？」

智也「そんなの簡単だ。手伝わせるためだ」

明久「当たり前前の事聞かないですよ」

陽一「僕、一言もやるなんて言っていないよね」

智也「大丈夫。お前の意見なんて聞く耳無いから」

陽一「鬼！悪魔！！」

智也「……上手くやったら部活のメンバーに
お前のこと紹介しないわけでもないが」

陽一「僕達親友だろ！手伝うに決まってるじゃないか！」

本当に調子いいな。

1日目は陽一をからかいながら終了した。

2日目は陽一^{バカ}が途中で逃亡しようとしたが、
『男が約束破ると女子にモテないぞ』と冗談交じりでいうと、すぐ
に戻ってきた。

3日目は琴吹が急用という事でこれなくなったので、
ここを明久と陽一に任せ女子のスケットに向かった。

そして、

日給8000×3×7＝合計168000円

まだ足りないな。

智也「さすがに疲れた」

紬「昨日は本当にすみません。家の用事でそうしても抜けられなくて」

智也「いや、家の用事なら仕方ないさ。でも、まだ足りないな」

明久「どうする？」

漣「あと何回かバイトするか・・・」

唯「あの・・・」

智也「ん？どうした平沢？」

唯「やっぱり、これはみんな自分のために使って！」

智也「いいのか？」

唯「うん・・・」

明久「けど、それじゃ欲しいギター買えないよ？」

智也「じゃあ陽一の方だけ使うとするんだ」

陽一「なにっ！」

唯「早く、皆と練習したいから・・・。

だから、もう一度楽器店に付き合ってくれる？」

こうして、軽音部+@によるバイトでギター購入作戦終了

（10GIA）

智也「ムスタングとかどうだ？一応、初心者向けのやつだぞ。って・
・・・」

結局、あのレスポールに行くのか。
よっぽど気になるんだな。

唯「あつ… エへへ…」

俺達の視線に気付き、曖昧に笑みを浮かべる。

漣「よほど気になるんだな」

律「ヨッシャ！やっぱまたバイトを…」

智也「だな。今度はより金が良いところを探すか」

明久「そうだね。今度は何する？」

紬「あつ… ちょっと待ってて？」

智也「ん？」

秋山の言葉に田井中が再びバイトをするかと意気込んで

俺がバイト先を探そうとしよう時

琴吹が何かを思い付いた様子で店員の所に歩いて行った。

店員と接触し話し出す琴吹。

漣「…何やってるんだ？」

智也「さあ…？……………あれ？なんだか店員が慌てだしたぞ？」

漣「何があつたんだ？」

智也「……………わからん」

秋山と会話をしていると店員と話していた琴吹が戻ってきた。

紬「そのギター5万円で売ってくれるって」

皆「……………」

律「えっ！？マジで！？」

唯「何！？何やったの！？」

智也・漣「……………」

琴吹の口から突如告げられた『5万円価格宣言』に
驚愕の声をあげる田井中と平沢。

そして絶句状態の俺と秋山と明久。

だつてこれ25万するんだぞ……それを5万って

紬「このお店、実はうちの系列のお店で」

智也「…マジかよ…」

唯「そ、そうなんだ…ムギちゃん、ありがとう！

残りはちゃんと返すから！」

何者なんだ琴吹って？

まさか本当に令嬢なのか………まさかな。

平沢は感激の表情でギターの前に座り込む。

律「よかったな？唯」

唯「うんっ！」

智也「これで楽器が揃ったな」

紬「そうですね」

律「よしっ！唯！家に帰ったらしっかり練習するように！」

唯「まかせといて！りっちゃん隊長——！」

互いにビシッと敬礼する田井中と平沢。

こうして、平沢は何とか念願のレスポールが手に入ったとき。

めでたし、めでたし

く平沢家・sideく

遂に、あのギターが手に入ったんだ！
これからは、いっぱい練習しなきゃね！！

唯「ギューイーン！！！」

うわぁ、ミュージシャンみたいでかっこいい！」

憂「お姉ちゃん、うるさい・・・」

唯「あ、ごめん憂・・・。つい、興奮しちゃって・・・。」

だって、凄く欲しかったギターが手に入ったんだよ！
名前は、何ていうんだっけ？

一日も早く、トモ君に追いつかなきゃ！
色んなこと教えてもらわないとね！

く後日・音楽室く

皆「おおおおお～～！！！！」

智也「ギター持つとそれっぽいな」

律「似合ってるぞ、唯！」

唯「えへへ・・・ねえ、ライブみたいな音出すにはどうするんだっけ？」

智也「アンプに繋ぐんだ」

平沢は、レスポールをアンプに繋いで弦を適当に弾いた。

ギューイイン！！！！

それは、軽音部というなのライブの始まりの音に聞こえた。

漣「やっとスタートだな。私達の軽音部・・・」

智也「ああ。そうだな。」

明久「頑張らないとね」

律「夢は、武道館ライブ！！！！・・・卒業までに！」

智也「今のままじゃ無理だろ」

律「おい！」

俺らがグダグダ喋っていると、平沢が・・・

唯「アンプで音を出すのはもう少し先だね・・・。」

智也「ば、馬鹿、ボリューム下げろ！！！」

唯「へっ！！・・・ギーーーーー！！！！！！！！・・・。」

俺は、とっさに耳を塞いだが平沢は至近距離で直に聴いたのでグロッキーだ。

漣「アンプから抜く前に、ボリューム下げないとこっとなっちゃうんだよ……」

唯「それを先に言っ……」

智也「……あつぶねエー」

唯「トモ君ずるい……」

相変わらずのグダグダさ……。

けど、ようやくスタートなんだよな……俺らのバンド。

アルバイト（後書き）

まだまだカップリング案募集中です。

色々案をいただけると嬉しい限りです。

もちろん智也と明久だけではなく

秀吉や康太でもかまいません！

これからも応援よろしくお願いします。

軽音部での日々2

〈放課後〉

和「唯」

唯「あつ　和ちゃん」

和「一緒に帰ろう」

唯「ゴメン？　部活に行かなきゃいけないんだー」

和「そうなんだ…それじゃあ仕方ないね。

ちゃんと部活頑張っているのね」

唯「今日はムギちゃんが美味しいお菓子持ってきてくれるんだ」

和「えっ？」

智也「……目的違うだろ」

唯「あつトモ君！」

智也「じゃあ部活行くぞ」

唯「うん！じゃあ和ちゃんまたね」

智也「じゃあな」

和「うん またね唯、智也」

真鍋に別れを告げ、部活に行くために教室を出る。
もちろん向かうは軽音部室。

ガチャ

唯「こんにちは」

智也「ちわっす」

挨拶をして音楽室に入る。

中には俺達以外の4人が既にいた。

律「ようっ!」

漣「こんにちは」

紬「いらっしゃい」

明久「いらっしゃい」

と4人から挨拶が返ってくる。

紬「唯ちゃん、智也君。紅茶は熱いのと冷たいの、どっちが良い？」

と琴吹が聞いてきた。

唯「私、熱いの！」

智也「俺は冷たいので」

俺と平沢は琴吹の質問に答え席に着く。

席には田井中と秋山、明久が座っており、

3人の前にはティーカップが置いてあった。

つてか俺今普通に答えただけど

智也「なあ 秋山」

漣「えっ 何？」

秋山は話がフラれるとは思わなかったんだろう。
少し驚いていた。

智也「ここは軽音部だよな？」

漣「あーっ、うん……そうなんだけど……」

俺の言いたい事がわかったんだろう、苦笑いを浮かべ肯定する。

智也「なんでお茶が出てくるんだ？」

明久「いいじゃん別に。僕としてはカロリーが取れるだけで幸せだよ」

智也「明久はまずはゲームとかの出費を抑えろよ」

明久「……………今月は誘惑が多くて」

智也「今月もだろ…………」

……………

唯「ねえねえ 何で澪ちゃんはギターじゃなくてベースをやろうと思ったの？」

席に着き琴吹が淹れる紅茶を待つてると平沢が秋山に質問をする。

澪「だってギターは……………は、恥ずかしい…………」

智也「恥ずかしい？」

澪「ギターってバンドの中心って感じで、

先頭に立って演奏しなきゃいけないし、観客の目も自然と集まるだろ？」

……………自分がその立場になるって考えただけで…………」

ボフンッ！

唯「漣ちゃん!!」

頭から煙を出し、倒れる秋山。

智也「おい！大丈夫か秋山!？」

律「それより言った通りだろ？」

智也「何が？」

律「これが、漣の持つスキルの1つ『恥ずかしがり屋』だ！」

いや、確かに前にも言ってたが何故にドヤ顔なんだ？

にしても……………

智也「繊細過ぎやしないか？想像しただけで、アレって……」

律「そうなんだよな。少しでも直ってくれと良いんだけどな。どうするかな。」

いっそトモに任せてみるか（ボソッ）」

田井中は秋山の繊細さが心配らしい。

…意外と友達想いなところあるんだな……

最後は何かつぶやいていたが……

紬「お待たせ！唯ちゃん！智也君、お茶が入りましたよ！」

俺と平沢の前に紅茶が置かれる。

すると平沢は今度は琴吹に……

唯「ムギちゃんはキーボードうまいよね。キーボード歴長いの？」

紬「私、4歳の頃からピアノを習ってたの」

コンクールで賞をもらったこともあるのよ」

唯「へっ！？へえーすごいねえ！」

確かにそれは凄いな。

コンクールで賞をとるくらいの実力を持つてるなんて……

唯「アキ君はキーボードいつから習ってるの？」

今度は明久に質問してきた。

明久「僕は小学校の時かな。母にすすめられてね。

中学のときまで少しやってた程度だから、琴吹さんと比べると全然だよ」

唯「それでも少しはできるんだよね。凄いよ」

明久「そうかな」

紬「さあ いただきましょう」

気がつけば目の前に、ケーキやらクッキーが並べられていた。

…だからここ軽音部だよな？

てか良いのかよ、学校でこんなことして…

唯「疑問に思ってたんだけど…」

平沢、やつとお前も気付いたか……

そりゃそうだ。目の前にこんだけのもんが並んだらいくらなんでも
気付くよな…

唯「この部屋ってやけに物がそろってるよね。ティーカップとか」

明久「あ、そういえばそうだね」

智也「そっちかよッ！！って明久お前もか！？」

唯「えっ！！トモ君どうしたの！？」

明久「い、いきなり大きな声出さないでよ。ビックリするじゃない
か」

智也「いや…わるい…やはり俺の考えは甘かったんだと

再び実感してしまつて声をあげてしまった…」

ここでは多分俺の勘違いなんだ。

これが正しいんだ。そうに違いない！ってかそう思おう！

明久「で、ここの物ってどうしたの？」

紬「ああ、それは私の家から持ってきたの」

智也「自前なのか！？」

その後俺は彼女達の会話を紅茶を飲みながら受け流していた…

テスト前

く下校中く

部活も終わって下校中。

今日は珍しく唯と一緒に帰っている。

唯「確かこうだったよね」

平沢は先ほどまで俺が教えていたギターのコードの押さえ方を練習していた。

智也「そうだな。家に帰ってからでも練習しておけよ」

唯「了解です隊長!」

智也「誰が隊長だ」

そこへ

和「唯!中川君!」

唯「あ!和ちゃん!」

平沢は真鍋に向かって手を振る

和「……何それ?新しい挨拶?」

平沢の手は先ほど教えていた
コードの押さえ方のままの状態だった。

唯「今日はねトモ君にね。」

ギターのコードについて教えてもらっただけ」

和「そうなの」

唯「うん。それで練習中に何度も指がつつちゃっただけ」

和「へー頑張ってるのね」

唯「それでトモ君に指のストレッチの方法を教えてもらっただけ」

そこで平沢は俺が教えたストレッチをやってみせる。

和「あまり無理しないでね唯」

智也「なあ、真鍋は平沢の幼馴染なんだよな？」

和「え？そうよ」

智也「やっぱり勉強とかも教えたのか？」

和「そうね。泣き付いてくる事が多かったからね」

智也「放課後部活でアイツに教えているんだが……疲れる」

和「あゝ」

真鍋は俺の言葉に納得するように答える

智也「ぶっちゃけ真鍋が凄いと思うよ。

よく今まで教えてくれたな」

和「そうでもないわよ。それに中川君だって吉井君や春原君に勉強教えてきたんじゃないの？」

智也「そうだが、あいつらには手を出していたからな。

それにどうしようもない時はメモだけ渡して勝手にさせてたし。

さすがに平沢にはそんな事できないしな……」

和「私から言えることは根気強くやることね」

智也「それしかないよな」

唯「ん？どうしたの2人とも」

智也「なんでもないぞ」

和「なんでもないわ唯」

唯「そう？そういえば和ちゃん今日は帰るの遅いんだね」

和「うん、図書室で中間テストの勉強してたから」

智也「そういえば、中間テスト近かったよな」。

メンドクサイが勉強しないわけにもいかないしな……
まあやるなら1番になってみたいしな。

そういえば確か文月学園の試験は特殊で試験時間内なら何問でも解けるんだよね？」

和「そうらしいわね。」

でも今度の試験は上限100点の試験らしいわよ」

智也「そうなのか？なんだ少し期待してたのに」

和「中川君って成績良い方なの？」

智也「まあそこそこだな。中学では上位に名前があつた程度だ。

真鍋はどうなんだ？」

和「私もアナタと同じ感じよ」

智也「なら、今度のテストの総合点数で勝負しようぜ。

負けたほうが昼おごりで」

和「まあいいわよ。受けて立つわ」

智也「お！乗りいいな！てっきり断られると思ったんだが」

和「まあたまにはこういうのもいいかなって思ってたね」

智也「なら、決まりだな」

和「ええ」

唯「そっか！テストか！って、ええ！？テストおお！？」

智也「驚きすぎだろ……つてか反応も遅いな」

唯「え？もうテストの時期なの？」

和「いえ、まだもう少しあるわね」

唯「あ、そうなんだ〜私ビックリしちゃったよ〜」

智也「まあまだ日にはあるから今から勉強しとけば大丈夫だろ」

唯「そつかあ……もう中間テストなのかあ……」

せつかくギター練習しようとしてたのに」

和「……………」

智也「その心意気はいいな」

和「…あんだ今まで試験勉強なんてしたことなかったじゃない」

唯「そつかーなら大丈夫だネ」

和「いや…大丈夫じゃないけど……………」

智也「…………心配だな」

中間試験

〽試験日当日〽

カリカリ…

シャーペンが踊る音を奏でる。

5月下旬。

高校生になり初めての中間テスト真つ最中。

智也（出そうなところをかなり絞って勉強したからな。
おっ！この問題もやったな）

カリカリカリカリ…。

まあ、これならなんとか大丈夫か？

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

陽一・唯「……」

「テスト終了後」

俺と真鍋の前には真っ白になった平沢と陽一の姿があった。

和「テスト…ダメだったの？」

そんな2人を見て真鍋が問い掛ける。

唯「…うん」

陽一「…さっばりです」

智也「平沢はともかくお前は予想通りだな」

唯・陽一「……………」

その一言を答え気力を尽くしてしまつたかのように再び黙り込む。
陽一もいつものように反論せず黙り込んでいた。

和「中川君は？テストどうだったの？」

智也「数学と英語は自信あるな。」

ただ国語だが古典が出てたから少しやばいかもしれないな。
そういう真鍋はどうなんだ？」

和「私は、まずまずかしらね」

そう言う奴ほど良い点取るだよな…

智也「まあ後はテストが帰ってきてからの楽しみだな」

和「そうね。どちらが勝つてるかしら？」

智也「それもお楽しみだな」

くテスト返却日く

教師から名前を呼ばれ次々とテストが返ってくる。

そして次は『す』の順番が来る。

教師「春原」

陽一「ハヒイ！」

智也（声裏返ってんぞ）

陽一は緊張してなのか手と足が一緒にでるといふ動作で教師の元に向かう。

そしてテストを貰い…

春原「……」

真っ白になった。

何点だったんだ？まさか赤点なのか？

ゆっくりした足取りで席に戻り席に倒れ伏した。

教師「中川」

いつの間にかに俺の番までやってきていたので俺はテストを取りに行く。

結果は

国語 66点	数学 100点	英語 100点
社会 83点	理科 86点	

総合435点

智也（数学と英語はよくできたな。でも国語がよくないな）

俺がテストを見て考えていると

教師「平沢」

平沢「ハ、ハイツ！」

いつの間にか平沢が呼ばれていた。

陽一と同じような動作でテストを貰いにいく平沢。

平沢「……」

テストを返してもらった瞬間真っ白に。

教師「真鍋」

和「はい」

キビキビとした動作で教師の元に行きテストを貰い、
満足げな表情で席戻る。

智也（あの表情じゃ点数良かったんだな）

.....

智也「で真鍋、どうだった点数は？俺は総合で435点だ」

和「私は476点よ。私の勝ちね」

智也「うげっ！476点！！9割いつてるじゃないか！？」

クッソー…凄いな真鍋は。俺は国語で足引っ張ったな」

和「国語はいくつだったの？」

智也「66点。数学と英語でせつかく満点取ったのに

国語が悪すぎた。古典の問題さえ出てなければな」

和「え？満点2つも取ったの？凄いわね」

智也「まあでも負けは負けだ。今度メシおこるわ」

和「ええ、お願いね」

智也「で、その2人はどうだったんだ？」

和「聞かなくても分かるわね……」

智也「まあな……」

俺と真鍋の前には真っ白になった平沢と陽一の姿があったのだった。

中間試験（後書き）

まだまだカップリング案募集中です。

これからも応援よろしくお願いします。

試験後の部活

「部室」

俺は魂の抜けかかった平沢をつれて部室に来ていた。部室にはもう皆揃っていてお茶を飲んでいた。

俺も平沢も琴吹にお茶をお願いして席に着いた。

律「やっとテストから解放された」

明久「疲れた」

紬「高校になって急に難しくなつて、大変だったわ」

智也「そうだな……そして、もっと大変そうなやつがここに……」

そう言つて俺はドンヨリしたオーラを出す平沢を指差す。

漣「そんなにテスト悪かったのか？」

秋山がおそろおそろ平沢に尋ねる。

唯「……ふっふっふっ……」

智也「………ついに壊れてしまったか」

物悲しい笑みを浮かべ真夜中なら秋山が卒倒しそうな声を漏らす平沢。

唯「クラスで2人…追試だそうです……しかも全科目……」

漣・律・紬「……うわぁ……」

答案用紙を見せやはり物悲しそうな笑みで伝える。

ちなみに赤点（追試）になるのは30点以下の点数の時です。

律「ん？2人？………という事は……？」

律はそういつと皆が俺のほうを見てくる。

智也「俺じゃねえよ」

明久「だ、だよね」

律「だよな〜トモじゃないか！じゃあ誰？もう1人？」

智也「虫以下の人物だ」

律「誰それ！？すげえ気になる……！」

智也「気にするな。気にしたら負けだ」

明久「なんだ陽一か」

智也「そういう明久や田井中はどうなんだ？

秋山と琴吹は大丈夫だろうが……」

明久「あ、僕はもちろん追試だよ！」

明久は隠すことなく宣言した。

智也「いや、なに堂々と言ってるんだよ」

明久「あはははっ!!」

智也「笑い事じゃないだろ」

紬「だ、大丈夫よ!今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない?」

漣「そうそう!ちよつと頑張れば追試なんて余裕だつて!」

智也「そつだな。頑張れば追試なんて余裕だつて」

琴吹と秋山が追試組を励ましてた。

唯・明「勉強は全くしてなかったけど...」

紬「あはは...」

智也「励ましの言葉返せ!」

俺達の激励を自業自得な理由で返す。

.....

律「何で勉強しなかったのさ」

唯「いや……しようと思ったんだけれど……」

なんか試験勉強中ってさ勉強以外の事に集中できたりしない？」

律「あゝそれはあるな。部屋の掃除はかどったりな」

明久「うん、あるね」

唯「勉強の息抜きにギターの練習したら抜け出せなくなちゃって
結局全然勉強できなかったの」

明久「僕は息抜きにゲームしてたら気づいたら朝だったんだ」

智也「おい、明久……お前ってヤツは……………」

もう明久の発言にはあきれるしかなかった。

智也「平沢は……少しは上達したのか？」

平沢「うんっ！おかげでコードいっぱい弾けるようになったよ！」

『どうだっ！』とも言わん限りの堂々とした表情でVサインをつ
くり威張る。

智也「威張るところじゃないからな」

秋山「その集中力を少しでも勉強に回せば……」

秋山がポツリと呟いた。

明久「田井中さんはどうだったの？」

律「私か」

正直、俺も気になっていたところだ。

律は俺たちにテストを見せる

智也「えっと、国語85点、数学72点、英語70点
社会87点、理科81点、総合395点」

ふう〜なんとか田井中には勝っていたか。

唯「こんなの、りっちゃんのキャラじゃない……………」

明久「だね。ちょっとガツカリだよ……………」

律「おい、どういうことだそれ!？」

智也「悪い、俺も正直驚いてる。

だって田井中がこんなに点数が良いなんて」

律「これくらいは余裕だ」

漣「へえ〜テスト前日に私に泣きついて来たのはドコの誰だってけ
？」

律「漣!それは内緒だろ!」

智也「なんだ、そういうことか。なら納得だ」

その後、試験が終わったということで雑談等を交わして部活終了となった。

追試 勉強会？

〽後日・音楽室〽

俺は部室で琴吹の入れてくれたお茶を飲みながらようかんを食べていた。

ガチャ

唯「あっ！今日はようかんだ」

明久「あ、本当だ！美味しそう」

職員室に行っていた明久と平沢が部室にやってきた。

唯「んゝ、ようかんおいしい」

平沢と明久は紬にお茶をもらいようかんを食べている。

智也「そういえば明久。職員室でなんて言われたんだ？」

明久「追試の人は合格点取るまで部活動禁止だっ」

おー、そうか。

部活動禁止か……

.....。

皆『ええっ?!?!?!?』

漣「結構厳しいな」

智也「おい、ならお前ら来たらマズいだろ」

律「だよな。ここに居るのもまずいんじゃ・・・」

唯「大丈夫だよ。お菓子食べてるだけだし」

明久「カロリー摂取してるだけだから」

紬「でもそれって、まずいんじゃ・・・」

漣「そうだぞ唯に吉井。」

この部自体無くなっちゃうかもしれないんだぞ!

智也「まあぎりぎり4人いるから大丈夫か」

唯「ヒドイよトモ君!」

智也「ならさっさと帰って勉強しろよ」

紬「それで、追試はいつなんですか？」

唯「ん」とねえ、1週間後」

智也「1週間後か…。」

明久「1週間もあれば、毎日ここに来てもお菓子食べに来て大丈夫だよ」

唯「そうだよ〜1週間もあるもんね。大丈夫だよ〜」

律「…って大丈夫な訳あるか！」

そして、唯は律の首絞めの刑に遭っている。

智也「1週間しかないが正しいんだが？」

明久「うう……僕のカロリーのためだし、皆と練習したいからね。僕頑張るよ」

唯「私も皆と練習したい！だから頑張る」

智也「じゃあ、精々頑張ってくれ・・・ッ！」

秋山に殴られた。冗談のつもりで言ったんだがさすがに、人事すぎたか？

漣「人事じゃないんだぞ智也！」

智也「冗談だって！まあ困った時は言ってくれば助けてやるよ。

まあまじめにやってればだが……」

でも、平沢は頑張るとか言っときながら
勉強しないタイプの人間だろうな……？

「追試まであと2日」

漣「ちゃんと、勉強してるよね……唯と明久……」

律「だいじょう……心配になってきた……」。

正直俺も、アイツらがだらけてる姿が目には浮かぶんだが……

するとそこへ

唯「……漣ちゃん助けて?!」

丁度その話の人物である平沢が救済を求めてやって来た。

漣「えっ!? 勉強してたんじゃないの……?」

唯「出来なかった……」

漣・律・紬「「ええっ!」」

智也「……やっぱりか……」

律「……よしっ 今晚特訓だ!」

唯「本当！？」

律「漣に教えてもらえば確実に合格点取れるぞ」

智也「やっぱり成績良いんだな秋山」

漣「いや そんな…」

俺の発言にポリポリと頬をかき、恥ずかしそうに照れる秋山。

律「うまいんだぜ？一夜漬け教えるの！」

漣「うぉーい！！普通に教えるよっ！！」

紬「どこで唯ちゃんの勉強をするの？」

唯「あつ ウチで良いよ。」

今日は両親いないし気兼ねしないで良いから

律「じゃあ唯の家で特訓するか」

律「そうだなーそういえば唯ん家行くの初めてだな」

俺は行く気はないから帰って作曲でもやってみるかなあ…

その意志を伝えようと口を開こうとした時…

智也「…お 『バンツー！』……………なんだ？」

急に部室のドアが勢いよく開いた。

そこには…

陽一「……」

唯「陽一君？」

切羽詰まった表情の…陽一が立っていた。

律「えっ？誰だっけ？」

田井中が疑問の声をあげる。

陽一「……」

漣「た？」

陽一「助けてー！！トモエもんっ！！」

国民的な猫型ロボットの様な名を叫び、

その同居人の眼鏡少年みたいな声を出し、俺に駆け寄ってきた。

とりあえず…

ドゴッ！

陽一「ぎゃあっ！！」

蹴っておく。

陽一「なにすんるんだ!!」

智也「おお悪い、ついつい蹴ってしまった」

陽一「そんな理由で蹴んなッ!!」

あと本気で悪いと思ってるのかッ!？」

智也「全く」

陽一「そこは全力で思えッ!!」

智也「うるせエな…落ち着けよ。平沢以外が驚いてるじゃねーか」

律・澪・紬「「「……………」」」

急に現われて俺に蹴られ、叫びをあげながら俺と話す陽一にポカンとする3人。

平沢はもう見慣れているので気にしていないが。

といち早く呪縛から解けた田井中が…

律「…だから誰だっけ?」

唯「春原陽一君。ホラ、私のギター買ってくれるときに一緒に手伝ってくれた」

律「ん?あっ!あゝいたな」

陽一「えっ忘れられていたの?」

智也「記憶に残らないほうが良いだろ。お前は」

陽一「んな冷たい事言っくなよ」

智也「黙れ変態」

陽一「誰が変態じゃア!!」

智也「オマエ」

陽一「違エよツ!!」

自分の事だと分かってないアホに指差し親切に教えてやる。

とりあえずアホに目的を聞くか…

智也「で？ 何しに来たんだよ？」

陽一「おお、そうだった…助けてくれトモエもん」

智也「誰がトモエもんだ」

陽一「ヤバいんだって追試!! 全く勉強できねエんだ!!」

智也「だろうな。予想してた」

陽一「な、なら……」

智也「1人で頑張れ」

陽一「ヒデエな!!」

どうやらコイツも平沢同様、追試の勉強が出来なかったらしい。
そこで何故か俺に助けを求めてきたみたいだ。

唯「陽一君もなんだね…」

陽一「唯ちゃんもか…」

うんうんと共感する二人。

律「じゃあ陽一が赤点を取ったもう1人？」

田井中が以前平沢が言っていた『追試2人』発言を思い出し俺に尋ねてくる。

智也「ああそうだ」

もう隠す必要もないので頷く。

陽一「ヘルプ ミー 智也!」

智也「しかたねエな…」

鞆から1枚の紙を取り出し、ある3文字を書く。
それを陽一に渡す。

陽一「ナニコレ？」

智也「退学届だ　これに必要事項を記入し、提出しろ。
そしたらもう勉強に悩む事はなくなる」

陽一「流石だな智也！！サンキュー！！」

バタンツ

俺手製の退学届を持ち部室から出ていく。

漣「智也…」

智也「すぐに戻って来る」

本気で退学しそうな勢いで部室から出ていった陽一に
秋山が心配そうに俺の名を呼ぶ。

バンツ！！

陽一「って退学するかアツ！！」

智也「ほらな？」

漣「う、うん…」

見事なノリツツコミを披露し部室に戻って来るアホ。
やっぱコイツをからかうのは楽しいなあ。

その後、平沢達女性陣は平沢家へ、俺とバカは春原家に向かいそれぞれ勉強を教える事にしようとしたが、

平沢から『一緒に勉強しよう』と誘われたのでバカがそれに賛成し平沢家で勉強会を開くことになった。

そしてせっかくだから明久も呼ぶことになったが、

明久と一緒に勉強していた秀吉と康太。

そして3人に教えていた雄二も一緒に混ざることになった。

全員で10人こんな大人数大丈夫か？

追試勉強会？

平沢の家は、ごく普通の一戸建てだった。

律「へえ、ここが唯の家か。唯の部屋とか散らかってそうだな」

唯「そんなことないもん」

律「ほんとか？」

唯「ほんとだもん」

雄二「えつと…平沢だったか？良いのか俺たちまで一緒に…」

雄二の疑問ももつともだ。

俺達の人数は10人もいるんだ。さすがに迷惑だと思っのが正しいだろう。

唯「大丈夫だよ雄二君！じゃあ、みんな上がって上がって。」

ちなみに先に自己紹介を済ませてある。

さすがに初対面の顔があるからな。

皆「……お邪魔します。」「……」

憂「あ、お姉ちゃんおかえり。」

奥から平沢とそっくりな子が出てきた。

憂「あれ？お友達？」

唯「うん、そうだよ」

憂「そうなの。初めまして。妹の憂です。姉がお世話になってます」

智也「久しぶりだね」

憂「あつ智也さん！お久しぶりです」

.....

自己紹介をし終わると今度はスリッパを並べ始めた。

憂「スリッパをどうぞ。」

本当にすごい出来た妹だな。

本当に姉とは正反対の性格に近いんじゃないか？

軽音部の皆が呆然としている。

唯「ありがとね、憂。ほら、みんなこっちこっち。」

人数が多いためリビングに案内する平沢は俺たちを呼ぶ。

康太「.....できた妹さんだ」

陽「うちの妹にも見習って欲しいよ」

明久「優しそうな妹さんだね。

姉さんもこうだったなら良かったのに（ボソッ）……」

秀吉「姉上もこれくらいじゃったら（ボソッ）……」

なにやら明久と秀吉がブツブツ言いながら遠い目をしている。

律「それにしても、姉妹でこうも違うもんかね」

唯「へ？どういうこと？」

律「妹さんに唯のいいところ全部持っていかれたんじゃないのか？」

唯「ひどい！」

少し涙目気味で反論する平沢。

平沢妹がやってくる。

憂「あの、よかったら皆さんお茶どうぞ。

買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど」

雄二「……ほんとによくできた妹だな」

明久「本当だよ。平沢さんが羨ましいよ」

憂「いえ、そんな大したことじゃないですよ。」

謙遜する平沢妹。

お茶がみんなに配られる。

雄二「ところで平沢妹は何年生なんだ？」

憂「中3です」

秀吉「ワシらとは1つ違いじゃのう」

律「できからいうと、姉より上だな」

憂「そ、そんなことないです。

お姉ちゃんなんか私よりずっとくいい人なんです！」

なぜか猛烈に姉をかばう平沢妹。

紬「受験生ですね」

琴吹は勢いにのまれ急な話題転換をする。

憂「はい」

明久「どこ受けるかもう決めてるの？」

憂「うーん・・・できればお姉ちゃんと同じ文月学園に行きたいんですけど、

私の学力で受かるかどうか・・・」

本気で心配そうな顔をする。

そういえばお姉ちゃんっ子だからさつき必死にかばったのか。

智也「大丈夫だって。

今、追試受けてる平沢や明久、陽一だつて通つたんだから問題ないって」

律「唯に勉強教えてもらえばいいんじゃない？」

憂「え、それは・・・大丈夫です。自分でできるから」

さりげなく遠慮する。

律「あははは。断られたぞ。」

智也「だな。何気に結構ぐさつて来るんじゃないか？」

唯「え？何で、何で？」

憂「で、でもお姉ちゃんはやるときにはやる人です！」

とことんかばうな・・・

そして少し妹さんと話をしたあと

俺は平沢や陽一、明久、秀吉、康太の5人に勉強を教えている。

秋山、琴吹と協力して・・・

えっ？田井中と雄二はって？

それは田井中が途中で勉強にあきて平沢や明久、陽一をからかっていたので、

秋山が怒ったので今は雄二と妹さんと一緒にゲームして遊んでいる。

その途中、真鍋が差し入れのサンドイッチを持ってやってきた。

唯「あ、和ちゃん」

和「どう、唯？ちゃんと勉強はかどってる？」

唯「うん、おかげさまで。」

智也「嘘つけ、勉強はかどってなかったから

今日みんなでお前の家に来ることになったんだろうが」

平沢のセリフに訂正を入れておく。

和「あら中川君いたの？それにしても人数が多いわね」

智也「なんか最初の方にグサツとくる言葉があったような気がするけど置いて……」

俺はみんなを真鍋に紹介していく。

皆「……よろしく……」

和「真鍋和です。唯とは家が近所で幼馴染なんだけど

高校では唯と中川君と春原君と同じクラスになりました」

丁寧にあいさつをする真鍋。

唯「和ちゃんとは幼稚園からほとんど一緒なんだよ」

和「不思議な縁よね。」

ああ、それよりほら、サンドウィッチ作ってきたわよ」

智也「ちょうどおなか減ってたところなんだ。

助かるわくさすが真鍋だ」

明久「わくい。カロリーがとれるよ」

和「それにしても唯の部屋、全然変わってないわね。」

サンドウィッチを出した後、真鍋はぐるっと平沢の部屋を見てつぶやいた。

唯「そういえば和ちゃんが私の部屋に来るのって久しぶりだね。

あ、そうだ。ちょうどいいからアルバムとってみんなで見よう」

智也「平沢、今何のために集まってるかわかってるのか？」

唯「分かってるよ。大丈夫、サンドウィッチ食べてる間だけだから」

康太「……………気になる」

秀吉「土屋の場合は違う意味のような気がするのう」

平沢はそういなり自分の本棚からアルバムを取り出した。

唯「はい、和ちゃん」

取り出したアルバムを真鍋に渡す。

真鍋は渡されたアルバムを開いて思い出を語り始めた。

和「中学の時私がしばらく熱出して休んでただけど、毎日唯がプリントを持ってきてくれたんだよね」

唯「私風邪ひいたことなくって」

和「でもね、その持ってきてくれたプリントの中に唯のテストが間違っ入っててね、

確かその時の点数が10点だったかしら」

智也「性格だけじゃなくて、点数まで変わってないとはな。よくそれでうちの学校に通ったな」

和「確かに。でもあの時はすっごく助かったのよ」

唯「えへへへ」

平沢は、昔のことに対しての感謝に少し照れていた。

その後、お喋りを中断し勉強に戻った。

智也「よし、じゃあ、ここやってみろ」

唯「え」と……………出来た！」

秀吉「……………なんとかできたのじゃ」

康太「……………疲れる」

明久「……………僕も」

陽一「……………出来たっ!!」

漣「これだけ解ければ合格点くらい取れるだろ」

琴吹「これで皆追試もバツチりね」

和「これなら大丈夫そうね」

唯「ありがと、漣ちゃんにムギちゃん！和ちゃん！……それに、トモ君も」

智也「ああ」

まあ、大丈夫だろう？皆で教えたんだから。何とかなるだろう。

↓数日後・音楽室↓

あ、今日は追試のテスト返しの日だったよな。

あいつらは大丈夫だったんだろうか？

俺は部室で琴吹が入れてくれたお茶を飲みながらそう考えていたら、部室の扉が開いた。

そこにはこの前勉強を教えた5人の姿があった。

智也「どうだったんだ結果は？」

明久「僕は大丈夫だったよ」

秀吉「ワシも大丈夫じゃったぞ」

康太「…………俺も大丈夫だった」

陽一「僕も何とか大丈夫だった」

唯「み、みんな……。ひゃ……。100点取っちゃった!」

澪&智「「極端な子(奴)」!」

何故か平沢だけは全科目100点という凄すぎる点数を叩き出していた。

琴吹「これで、追試は終わったわね。お疲れ様」

唯「ありがと、ムギちゃん」

明久「やっとこれで僕のカロリーが」

智也「いやいや目的違っただろ」

琴吹「なら、お茶を入れますね。

木下さん達もいかがですか?」

秀吉「ワシらもよいのかの?」

康太「……………いいのか?」

智也「いいんじゃない?どうなんだ田井中?」

律「OKだぜ！ムギのお茶は美味しいからな」

智也「だよ」

秀吉「ならすまぬが邪魔するのじゃ」

康太「……………（コクコク）」

陽一「いただきます！」

智也「お前のはない」

陽一「ヒドイ！！」

琴吹「大丈夫ですよ春原さん。皆さんの分もありますから」

そして琴吹が皆の前にお茶を置いていく。

そして皆がお茶を飲み美味しいという声をあげていく。

智也「そういえば平沢コード覚えてたんだろ？」

ちよつと、弾いてみるよ。

C A m 7 B m 7 G 7 弾いてみる」

唯「バッチリさあ！XでもYでもなんでもござれ！」

ん？ 何だよソレ……………。

智也「…………お前もしかして…忘れたとかじゃ……………」

唯「…………その通りです……………」

智也「お前はどんな脳してんだよ」

漣「……智也……唯の事……頼んだぞ？」

智也「マジで!？」

唯「へっ?」

智也「『へっ?』じゃねエよ!また、振り出しじゃんかよ!
もう……疲れました……」

漣「私も少しは手伝うから……」

智也「……ああ、頼む」

秀吉「智也は大変じゃな」

康太「………頑張れ」

結局、今日も練習をせず部活を終えたのであった。

追試勉強会？（後書き）

久しぶりに和登場です。

gd gd になっ たかも

皆さんの感想お待ちしています。

追試後

明久と平沢の追試も無事終わり、今日は明久と一緒に帰っていた。

今日は明久の家で食事を食べに行くからだ。

これは追試の勉強で世話になったお礼らしい。

智也「もう7時か…」

明久「さすがにお腹へったね」

智也「だな。つてか本当に飯食えるのか？」

明久「昨日収入があつたから大丈夫だよ」

智也「いつもあるようにしろよ……」

明久は生活費のほとんどをゲーム費などに当てているので、食生活がひどかったりする。

最近の水と砂糖と塩と油で過ごしていたらしい。

つてかそんなので生きていられるのはお前だけだぞ。

明久と買い物をしている中で俺は見知った人物を見つけた。

？「あつ」

どうやら向こうも気付いたらしい俺たちの方にやってきた。

見知った人物それは平沢だった。

憂「こんばんは。智也さん、明久さん」

妹の方の。

智也「ああこんばんは」

明久「こんばんは平沢さん。この前はお邪魔しちゃったね」

憂「そうですね。あつそれと明久さん。

私のことは名前で良いですよ。それだとお姉ちゃんとかぶつちやいますから」

明久「あつそうだね。じゃあ憂ちゃんだね」

憂「はいっ」

そう言つて笑う平沢妹。

憂「お二人は何してたんですか？」

智也「今日は明久が晩飯をごちそうしてくれるみたいだから、その
買い物だな」

憂「晩ご飯をですか？」

智也「ああ、この前の勉強のお礼だつてさ」

明久「智也には色々世話になっているからね」

憂「そうなんですか…」

そう言ってなにやら妹が考え込む。

そして…

憂「あの もし良かったら家で晩ご飯食べませんか？」

凄い提案をしてきた。

智也「えっ？メシ？」

憂「はいっ 私、今日いつもより多めに食材買ったんで
どうしようかと思ってたんです。だから、お二人ともどう
ですか？」

首を傾げる平沢妹。

智也「だって明久どうする？」

明久「どうしようか？」

憂「あ、あの迷惑でしたら良いんです！

私が勝手に言い出したことですから…」

俺と明久が相談しているのを見て急に慌てだし、
最後にはションボリしだした。

智也（アレ？…このパターンは…）

そう思い周囲をグルッと見渡す。

そこには噂好きの主婦や仕事帰りのスーツ野郎、学生グループ、その他諸々が俺達を見ていた。

更には…

「見て！奥さん！あの人、女の子いじめてない！？」

「こ、これは…イケませんね…」

「おいおい、あのにーちゃんたち見てみるよ、あんな可愛い子泣かしてんぞ」

「最低だなアイツ…」

というとんでもない誤解をあたえていた。

更にはハタから見れば俺と明久が平沢妹を泣かしている状況に見えるらしい。

明久「なんかマズくないこの状況？」

明久の意見もごもつともだ。

俺は噂している人たちををギロリと睨む。

「ヒイツー！！」

「ヤベエ！コッチ見たー！！」

「おいッ！逃げるぞッ！！」

一目散に逃げ出す。

それにより更にどよめきはしる。

そんなこの状況をなんとかするには…

智也「…わかった。行く…」

明久「じゃあ憂ちゃん。ごちそうになっていいかな？」

俺と明久が折れるしかないのだ。

まあ別に嫌じゃないわけだし、ただ迷惑じゃないかなと思ったただけだしな。

憂「えっ？良いんですか？」

明久「うん！」

シヨンボリ顔から一変、少し嬉しそうな表情をする。

智也「じゃあ行こうぜ…」

そう告げて早々に歩き出す。

憂「あっ はいっ！」

明久「あっじゃあ僕が荷物ぐらい持つよ」

歩き出した俺に駆け寄ってくる平沢妹。
そして妹さんから荷物を預かりその後が続く明久。
俺達は夕暮れの街を平沢家へ歩きだした。

憂「ただいま」

明久・智也「おじゃまします」

平沢家到着。

唯「おかえり」憂

妹が帰還を知らせると奥から姉がパタパタと参上した。

憂「ただいま、お姉ちゃん」

唯「あれっ？トモ君にアキ君？どうしたの？」

妹の横にいる俺と明久に気付き疑問の声をあげる。

憂「偶然会ってね。晩ご飯に招待したの」

唯「おおーそうだったんだーナイス！憂！」

憂「えっ？ あ、ありがとう」

何故かサムズアップする姉に少し困惑しながらも礼を言う妹。

何がナイスなんだ？

唯「まあ上がってよトモ君にアキ君！」

憂「どうぞ智也さん明久さん」

智也「…お邪魔します」

明久「お邪魔します」

ここまで来たからには引き返す事も出来ず平沢家に足を踏み入れる。

憂「それじゃあ すぐに晩ご飯の準備するね」

唯「は〜いつ」

明久「なら、僕も手伝うよ。それでも料理は得意なんだ」

憂「いいんですか？」

明久「うん！もちろんだよ！この前お邪魔したお礼させてね」

憂「じゃあお願いします」

智也「じゃあ俺も……」

明久「智也は平沢さんとゆっくりしてなよ。

今日は元々僕が智也にご馳走する予定だったんだから」

憂「そうですね。智也さんお姉ちゃんと一緒にいてくださいね」

智也「……ああ、わかった」

晩メシに招待され何もしないのは気が引けるので手伝おうかと思っ
たが

やんわり断られた。

唯「ねえねえトモ君！」

智也「なんだ？」

唯「コード教えて！」

何故かテンションが高い平沢がそう言うてくる。

床に座っている平沢を見ると

その横にレスポールと秋山が購入したサルコード（長いので省略）
があった。

どうやらコードを覚えていたらしい……ていうかそりゃそうだろ。

この前の追試勉強で覚えたコードを全てデリートしやがったんだか
らな。

部活以外の時間でも覚えてもらわにゃ俺が報われん。

智也「…分かった とりあえず今まで覚えたコードを弾いてみる」

唯「了解！」

なんで敬礼？

.....

唯「これが『D m』だっけ？」

智也「違う。そりゃ『F』だ。

つかそっちの方がムズいのに何でアッサリやってんだよ……」

唯「あっ こうだ！」

智也「『B 7』だからなそれ」

平沢にコードを教えていると

明久「ご飯出来たよ」

明久と妹さんがご飯を運んできた。

唯「おっ ゴ・ハ・ン 今日は何？」

憂「ハンバーグだよ」

唯「ハンバーグ！？やったネ！」

智也「おおこれは美味しそうだ」

ギターレッスンを中断し晩メシを食べることに

憂「でも本当に明久さん料理お上手ですね」

明久「えっ？そうかな？小さい頃からやってたからね」

智也「明久は家事については凄いよな。家事以外はアレだけど……」

憂「でも、男の人でここまで料理が出来るなんて驚きですよ」

唯「それにおいしいよー憂！アキ君！」

明久「ありがとう平沢さん」

憂「ありがとうお姉ちゃん。あっ ほっぺたにソースついてるよ？」

唯「えっ ドコ？」

憂「動かないで拭いてあげるから」

唯「んっ」

憂「はい、もう動いていいよ」

唯「ありがとうー憂」

憂「どういたしまして」

智也「……」

唯「あれ？どうしたのトモ君？食べないの？

食べないなら私が食べちゃうぞ？」

憂「ダメだよお姉ちゃん。それは智也さんの分なんだから」

唯「分かってるよ」冗談 冗談 「」

憂「もう～お姉ちゃんったら」

そう言つて互いを見て笑い合う姉妹。

本当に仲のいい姉妹だな。

そしてまた明久がブツブツ言いながら遠い目をしていた。

唯「それじゃあ、また明日、学校でねトモ君、アキ君」

憂「またいらしてくださいね智也さん、明久さん」

智也「ああ」

明久「うん！」

晩メシの後、平沢姉妹と談笑し、
明久と妹さんが後片付けしている間に、

もう少しギター練習をしておいとまする事に。

明久はその時に妹さんとメルアド交換をしたらしい。

そして平沢姉妹の事を名前で呼ぶようになった。

平沢が妹さんは名前なのに自分が苗字だったのが嫌だったらしい。

合宿？

「ある7月の放課後」

陽一「おっそうじ〜おそうじ〜たのしいなあ〜 …… って楽しくないわっ！〜」

智也「やかましい黙れ！！お前の顔面で床でも拭いてろ！」

陽一「そんなことするかア！！」

本日太陽が照りつける7月中旬。

俺と陽一は放課後に2人だけで空き教室の掃除中だった。

理由は簡単、今日は週に1度の掃除当番の日。

そしてこの場所が俺達の班の掃除区域だからだ。

だが…俺達2人しかない。

通常1班4人体制なのだが都合悪く、2人病欠なのだ。

智也「はあ…」

ため息だつて出たくなる。

何が悲しくてこのバカと2人で掃除なんてしないといけないんだ。

……サボるか……
智也

陽一「なあ智也」

智也「なんだあ？」

陽一「正直ダルくね？つうかサボらね？」

どうやら陽一も同じ事を考えていたらしい

智也「……そうだなサボるか」

陽一「だな。こんな空き教室掃除してもしなくても同じだよな」。

よしっ 行こうぜ！」

智也「……ああ」

珍しく意見が一致したので実行に移そうとした時……

山中「中川君、春原君、ちゃんと掃除やってる？」

教室のドアから我が校の音楽教師、山中教諭が顔を覗かせた。

陽一「あれ？先生何でここにいるんすか？」

智也「……」

山中「あなた達の担任の先生がね

『アイツらは真面目にやってないと思うので、様子見て来て

くれませんか?』

って言われたからよ。私もコッチに用事があったからね、そのついでに」

陽一「ぐっ…」

智也「……信頼ねえな俺達」

ってか人を派遣しないで自分で確認しに来いよ。

山中「それで真面目にやってたの?」

『今からサボろうとしてた』なんて事は言えず…

智也・陽一「もちろんですよ」

そう答えるしかないのだ…

山中「そう。それじゃキッチンと最後までやってね。私も手伝うから」

陽一「えっ!?! 先生もやるの?」

山中「ええ あなた達二人だけじゃ時間がかかりそうだから

…何か不都合でもあるの?」

智也「いや、そんなのないですよ!

先生が手伝ってくれるとは思ってなかったからつい、

なあ陽一?」

陽一「そうですよ!先生が手伝ってくれるのならたら百人力だぜ!!

山中「それじゃあ早く終わらせましょう。中川君は部活があるんだから尚更ね」

智也・陽一「はい」

結局、逃げ出す事も叶わず俺達は掃除をするはめになった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

紬「智也君」

智也「ん？」

掃除終了後、陽一と別れ部活のために音楽準備室を
目指し歩いていると、後ろから琴吹に声を掛けられた。

紬「智也君も今から部室に行くの？」

智也「ああ。琴吹もか？」

紬「そうなのよ。今日掃除当番で遅れちゃって、智也君は？」

智也「俺も同じ理由だ」

紬「そうなんだ」

琴吹と本当にたわいもない話をしていると気が付けば部室の目の前に来ていた。

智也「お先にどうぞ」

紬「ありがとう」

今は必要がなさそうなレディーファーストを発揮し部室に入る。

ガラッ

紬「ごめんなさい。遅れちゃって」

智也「遅れました」

詫びをして入る琴吹と軽いノリで入室する俺。

すると、どうだろう中の様子は…

漣「……………」

律「うおお……」

唯「……痛そう」

明久「うん……」

怒ってますという風に腕を組み仁王立の秋山と

正座をし頭を押さえる田井中、

同じく正座をして田井中を見る平沢と明久の姿がそこにはあった。

そんな状況を見て隣りにいる琴吹は…

紬「えつと……マドレーヌ又食べる？」

智也「何でだよ！」

思わずツツコンでしまった。

………

智也「へえ、合宿ねエ……」

全員着席し、琴吹が人数分のマドレーヌと紅茶を用意すると秋山が喋りだした。

なんでも軽音部の強化合宿を提案したが平沢と部長と明久が、
合宿＝遊び＝気分MAX になり全く話を聞かず、
更には秋にある学園祭に向けての合宿だと説いたが、

初めての高校の学園祭＋高まる期待!! 話が脱線になり
違う意味での火山が噴火したらしい。

ちなみに噴火の影響をモロに受けたのが部長である田井中だ。

漣「ムギと智也はどう思う？」

いくら慌てずやっていこうって言っても、

もう3ヶ月にもなるのに1度も合わせたことないなんて」

紬「まあまあまあまあ……」

智也「……そうだな～さすがにヤバイな」

そして俺は1度紅茶に口に含む。

とそこで琴吹が…

紬「行きましょう!! みんなでお泊まり行くの夢だったの～!!」

何やら、えらく興奮した様子で賛成1票を投じる。

その『みんな』は俺と明久も含まれてるんだろうか？

唯「そうなんだ～」

律「じゃあ海にする？それとも山にする？」

漣「だから!! バンドの強化合宿って言ってるだろ!!」

律「冗談だつて～」

漣「まったく！！はあゝ。智也はどう思う？合宿」

智也「そうだな…」

ここで部長に怒り、ため息で何とか気持ちを整理した
(気持ちはよく分かる) 秋山が俺に意見を聞いてくる。

そこで少し考え込む。

智也「……確かに秋山の言う通りだな。

軽音部が始動して未だに合わせたことがないというのは、
ハッキリ言って危機感を覚えた方が良くと思うぞ」

漣「うんうん。智也の言う通りだ」

律「おお…トモが真面目なことを…」

漣「律」

律「ゴメンナサイ…」

失礼な事を言ってくる奴を秋山が黙らせる。

智也「ここらで学園祭にむけて一遍

ビシッと気持ちを固めた方が良さだろうな。

平沢もある程度はギターを弾ける様になったんだ、
合宿ってのは悪くはないと思うな」

漣「流石智也だな！その通りだよ！」

俺の意見に感動する秋山。

苦労してるなお前……俺もだけど。

漣「という訳で軽音部で夏休みに強化合宿を行います！

いいですね！」

唯「私は元々賛成だから」

律「もちろん私もOKだぜ！」

紬「私も私も」

明久「僕も」

次々に賛成してくる4人。

平沢と田井中、明久は本当に理解してるのか怪しいが……
それから1つ、言っておかなければならない事があったな。

智也「まあ、頑張ってくれ。俺と明久は不参加だな」

唯・漣・律・紬「……」

明久「えっ？僕も？」

時が止まった……

律「……ハッ！えっ？何言ってるの？」

智也「何がだ？」

律「合宿だよ！合宿！何で不参加なんだよ！」

田井中がいち早く回復し身を乗り出しながら俺に質問してくる。

明久「そうだよ智也。それになんて僕もなの？」

智也「じゃあ問題だ…平沢」

唯「はいっ 何でしょう？」

智也「俺と明久とお前等4人の違いは何だ？」

唯「え〜っと……………あつ！DNA！」

智也「そりゃそうだ。てか全人類がそうだ。不正解」

唯「ええ〜違うんだ…」

『DNA』って知ってたんだな。これはバカにしすぎか…

智也「琴吹わかるか？」

紬「え〜っと……………性別？」

智也「正解だ。後で田井中に何かおごってもらうつといい」

律「なんで私なんだよ！じゃなくて…それが理由か？」

智也「そうだ」

これが俺と明久が合宿不参加の理由だ。
何泊するのかしらんが1泊でもするのなら俺は行かない。
ってか行けない。

唯「え〜っ　なんで〜？」

平沢が疑問の声をあげる。分からないのかコイツは？

智也「…いいか。合宿つつうことは泊まんだろ？

修学旅行みたいに大勢じゃねえんだ。

若い少人数の男女が監理者もなしに泊まれるわけないだろ」

明久「あっそういうことか〜なるほど〜」

って明久お前も今わかったのか……

まだ理解していない様子の田井中と平沢に説明をする。

と、ここで……

漣「でも……」

智也「ん？」

黙っていた秋山が口を開いた。

漣「それじゃあ智也と明久の練習はどうするんだ？」

智也「それは、お前らが合宿から帰ってきてから合わせるし、もちろん2人で練習するさ。サボりはしないさ」

漣「それじゃあ合宿をする意味がないよ。

これは軽音部の強化合宿なんだから智也も参加しないとダメだよ」

智也「……」

確かにそうなんだが……

あれ？ おかしいな？

俺の中じゃ秋山は俺の意見に賛同してくれると思ったんだが…まさかの裏切りだ。

唯「そうだよサツくん！ 私たちはこの6人で『文月軽音部』なんだから！

トモ君とアキ君も行かなきゃダメ！」

紬「私は『みんな』で行きたいの。だから智也君も一緒にね？」

智也「……」

漣「それにやっぱり監視者なしで男女が行くのは危ないかもしれないが、

私は智也と明久なら大丈夫だと信じているからな」

律「そうだそうだ。漣と唯とムギの言う通りだ！

てゆうか部長権限で強制的に連れて行くからな！」

明久「ここまで言われたら断るなんていえないよね智也」

皆「……ジー……」

俺が口を開くのを待つ様に、10つの瞳が俺を凝視してくる。

智也「はぁ……」

確かに秋山の言い分は正論だ。

何より合宿を強く勧めたのは俺だし。

それに…

『この6人で文月軽音部』

そんな事言われちゃあな…

智也「…分かったよ。俺の負けだよ。行けばいいんだろ…」

白旗を振り降参……敗者決定、俺。

漣「うんっ」

唯「やったー！」

紬「よかったわ」

律「こうしてトモは合宿に参加することになったのだった」

智也「なんでナレーション口調なんだよ……」

明久「まあいいじゃない」

智也「1つ聞いていいか？スタジオ付きの旅館とかあるのか？」

俺の合宿参加問題が解決した途端、俺の口から別の問題が発生した。
軽音部の合宿なんだ、

楽器の音を出しても問題なく合宿できる場所なんて限られてくる。

ましてや俺達は学生。

スタジオ付きの場所なんて借りる金は無いに等しい。

唯「私、お金ないよ？」

智也「ちなみに俺もそこまではないぞ」

漣「そ、それは……」

宿泊費まで考えていなかったんだろうな。秋山が口ごもる。

漣「ム、ムギ？」

紬「はいっ？」

秋山が琴吹に何やら話しかけていた。

漣「別荘とかあるか……」

智也「そんなのあるわけ……」

紬「ありますよ」

皆「」「」「あるんかい」「」「」

秋山が望み薄で琴吹に尋ねるとアッサリと返事が返ってきた。

それにより声が揃う俺達。

本当に琴吹って何者だ？本当にお嬢様だったりするのか？

琴吹の寛大な心で無事に合宿場所を確保する事が出来た。

合宿？

昨日夜中までゲームをして気付けば俺は目覚めていて、目の前には自分の部屋の天井が広がるだけであった。

…にしても暑いな。太陽はもう活動を始めているようだし。俺は枕元にある時計を見る。

7月30日 5:07

今日から軽音部の合宿日である

合宿の集合時間は8時。

ここから集合場所である駅まではゆっくり歩いてても20分もあれば行ける。

つまり、余裕を持ったとしても軽く7時前までは寝られる計算となるのだ。

…よしもう一眠りしよう。

.....

現在時刻は5時半。

俺は今シャワーを浴びているところだった。

あれだけ汗かいたんだ、やっぱり朝のシャワーは気持ち良いぜ！

…結局あの後眠れたのかって？当然寝れなかった。暑いし。

・・・・・・・・・・・・・・・・

朝飯も済んだし荷物も全部準備できた。

ギターも持った！、服装も身だしなみもある程度と整えた。

俺は時間を確認する。 7時10分、まだまだ余裕はある。

……やる事も無かったので、俺はもう集合場所に向かうことにした。

予想通り、集合場所である駅前の広場みたいな所には誰も来ていない。

7時30分 集合時間まであと30分はある。

俺は傍にある円形のベンチに腰を下ろし、

イヤホンを取り出して音楽を聴きながら待つことにした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

暫くして、見覚えのある2人がこっちの方に向かって歩いているのが見えた。

… 見た感じ田井中と秋山だな。

俺はイヤホンを外し、2人に向かって軽く手を振った。

すると、2人もこっちに向かって走って来た。

智也「2人ともおはようさん」

律「よう、トモ！」

漣「おはよう智也。早かったんだな」

智也「まあ家にいてもする事無かったしな。

暇だったからさつき来たんだ。」

律「ふ〜ん。漣、今何時だったけ？」

漣「今……7時45分だけど」

7時45分…結構早いな。

正直ギリギリに来るのだとばかり考えていた。

漣「智也。唯とムギと明久は？」

智也「3人ともまだだな。明久からはもうすぐ着くってメールはあった。」

まあまだ待ち合わせまで時間はあるし、とにかく待つてようぜ。」

そう言っただけ俺たちは、さつき座っていたベンチで3人を待つことにした。

.....

その後、5分位経って明久と紬も到着した。

これであとは唯だけ……なんだが、その唯が不安でしようがない。

時間は刻一刻と過ぎていく。

時が経つにつれて、嫌な予感が確信に変わっていつているのが分かる。

律「なあ、漣。唯まだ？」

律がいきなりそう尋ねた。

漣「集合時間まであと2分あるんだ。その位待ってやれ」

紬「そうですよ。唯ちゃん、きっと来ますって！」

今日は大丈夫だよなアイツ……

そこへ

唯「皆、おはよ」

噂の張本人がやってきた。

時間は8時丁度かまあ遅刻したわけでもないしいいか。

律「唯、遅いじゃねーか？心配したんだぞ？」

唯「ごめんごめん。途中で荷物持ってくるの忘れてて」

明久「荷物忘れるって」

唯「エヘヘヘっ」

智也「さて、じゃあ全員揃ったことだし行くか」

俺たちは切符を買い、

電車に乗って琴吹の別荘近くの駅まで向かった。

駅に着き別荘に向かって歩いていく。

潮風を感じつつ駅から5分程歩くと、

いかにもリゾートにありそうな感じの建物に到着した。

どうやらココが琴吹の別荘らしい。

大きさは…恐らく俺の住んでいるアパートよりもでかい。

これでもビックリなんだが琴吹曰く

『本当はもっと大きな所を借りたかったんだけど、

一番小さい所のこしか借りられなくて…』

と言うことらしいからまたビックリだ。…これで十分です。

正直、こんな所にタダで滞在しているのだろうか…？

俺は罪悪感丸出しで別荘の中に入った。

合宿？（前書き）

あけましておめでとございます。

これから『バカとけいおん！』と召喚獣をよろしくお願いします。

合宿？

律「おおーほほーい。」

唯「わぁー、すっごーい。」

明久「…うわー。」

玄関の扉を開けると、海に見える広々としたリビングが広がっていた。

…俺は一瞬旅番組でも見ているんじゃないかと錯覚した。
明久と律と唯の反応もこの手の番組にありがちなんだが、それ以上に部屋がすごく綺麗だ。

智也「……本当にタダで泊っていいのか？」

俺は恐る恐る確認してみることにした。

琴吹「もちろん！だって別荘ですし…」

琴吹には本当に感謝しなければならなかった瞬間であった。

澪「…ん？これは……。」

どうやら澪が何かに気付いたらしい。

智也「どうした？」

澪「ほら、これ…」

秋山の指差す方を見ると、高そうな果物が盛られた器があった。高そう……というか見たことないようなモノまであるな……。

紬「あつごめんなさい。」

何もしておかなくていいって言うておいたんだけど……」

智也「え？」

俺は思わず声を発してしまった。

他にも、大富豪の家にありそうな天井付きのベッドがある部屋があったり、

冷蔵庫には高そうな食材が鮮度を保った状態で入っていたり、

……ああこの家には俺たちが到底味わえないような世界が広がっている。

そして、なんでだろう。俺の住んでいる環境がちつぽけに見えてきた……。

紬「どうぞ」

紬に案内されて俺と秋山と明久はある部屋に入った。

そこにはドラムやアンプ、それにマイク

……そう、バンドの練習には欠かせない機材が置いてあったのだ。

琴吹の言っていたスタジオとは多分この部屋の事だろう。

海岸に面していて雰囲気もなかなか洒落ている。

……うん、最高の練習場所かも。

紬「しばらく使っていないから、ちゃんと動くかどうか心配だけど……」

俺はマイクを、秋山はアンプを確認する。

マイクもアンプも大丈夫だった。

智也「……ん？平沢と田井中は？」

明久「そういえば途中でいなくなっちゃったみたいだけど……」

そういえばどっか行っただな、あの2人。

まあ、あとで来るだろうからいいか。

漑「全く……しょうがないな……」。

溜息交じりに呆れていた漑はバッグの中から何かを取り出していた。

バッグの中から現れたのはラジカセだった。

明久「何コレ？」

漑「ああ、コレ？」

そう言うと漑はラジカセの再生スイッチを押し、ラジカセを床の上に置いた。

すると、どこかのロックバンドのものであろう演奏が流れてきた。

漣「昔の軽音部の学園祭でのライブ…この前部室で見つけたんだ」

智也「すげえ……」

俺たちは言葉を失っていた。

紬「…私たちより相当上手い」

漣「なんか…聴いてたら、負けたくないなって……」

明久「それで合宿って言い出したんだね」

いくら平沢が初心者だからって、

もうあれから3ヶ月は経とうとしているのだ。

文化祭も迫っているし、そろそろみんなで合わせてもいい頃だろう。だが、俺たちは残念ながら1回も合わせて演奏をしたことがない。

紬「……負けなと思う、私たちなら」

智也「…俺もそんな気がするな」

…なんでこんな事が言えるのかは自分でも分からなかった。

それは、今の秋山を励ます為でも何でもない。

ただ、本当にそんな気がしたただけだったのだ。

そう思った矢先であった。

律「ようし、遊ぶぞー！ー！！」

唯「オー、イエース!!」

勢いよくドアの開く音がした… かと思えば、遊ぶ気マンマンの2人がそこにいた。

…その証拠に、すでに水着を着ている。

さらに、平沢はビーチボールを、

田井中はモリ（コイツ、黄 伝説でもする気なのか…？）を構えていた。

漣「ちよつと待て！練習は…！？」

唯「先行っているから、4人とも急いでねー」

秋山の思いも虚しく、平沢たちは早くも海へと行ってしまった。

漣「…これでも……？」

秋山は2人の行動に完全に呆れて果てていた。

智也「……………」

俺は何も言えなかった…… いや、言う気が起こらなかった。

律「おい」

唯「早くー!!」

既にバカンスな2人の呼ぶ声がする。

紬「ちよつと待って…… すぐ行くからー」

明久「少し待っててすぐに行くから」

ちよつと待て、明久も琴吹も遊ぶ気なのか？

紬「行こ、漣ちゃん、智也君」

漣「え！？ムギも遊ぶの？」

俺はどうしたらいいのかわからない。

紬「せっかく来たんだし、少しくらいなら……ね？」

そう言った紬は満面の笑みを浮かべていた。

明久「少しなら良いんじゃないかな？」

2人完全に遊ぶ気だ……どうすれば……。

漣「でも……私は……。」

紬「……じゃあ先行ってるね。私、待ってるから」

明久「僕も行ってるね」

そう言つて、明久も琴吹も行ってしまった。

スタジオに残されたのは、俺と秋山だけ。

俯き加減の秋山の顔を覗くと、目に涙を浮かべているのが分かった。

漣「…なあ智也、私どうしたらいいの……？」

智也は声を震わせてそう言うと、その場に座り込んでしまった。その肩は小刻みに震えている……多分、泣いているんだろう。

俺がもし秋山の立場なら、4人にブチギレているかもしれない。秋山の思っている事がなんとなく分かった気がした。

俺は秋山の傍に座った。

智也「俺だって分からない。

でも…さっき、昔の軽音部に『負けなと思う』って言ったよな？」

秋山は俯きながらもこくりと頷いていた。

智也「確かに、昔の軽音部は上手いよ。

俺だって一瞬プロがやっているものかと思ったぐらいだし。

…けどさ、勝つ為には技術面だけじゃ足りない気がするんだ。

>チームワークくってモノが無ければ、何だって決して上手くは見えない。

…俺たち6人で力を合わせて全力で演奏する

そうすれば、自ずと結果は出てくると思うんだ。」

漣「智也……」

智也「確かに明久たちは遊びに行っただけさ…。

要はメリハリを付けて練習すればいいんじゃないか？

例えば、朝と夕方は練習して昼と夜は思いつきり遊ぶ

……みたいな感じで。ずっと練習じゃ疲れるだろ。

「少しならリフレッシュってことで良いんじゃないかな」

そう言っただけ俺は立ち上がった。そして、海岸の方を見る。やっぱり、平沢たちは楽しく遊んでいるようだった。

智也「見てみるよ、アイツらは楽しそうに遊んでいるじゃないか。きっと楽しいぜ、こうやってみんなで遊んだら」

言ってる俺も遊びたくてウズウズしているのが分かった。

智也「それにさ秋山は1人で溜め込みすぎなんだよな。

こういうことは1人で溜め込まないで、

相談すればいいよ。相談事なら俺も一緒に考えるしさ。

まあいい案が出るかは別だけど……って言ってるなんか恥ずかしいな／＼／＼」

漣「智也……」

智也「ん、なんだ？」

漣が顔を赤らめながら、何かを言いたそうにしていた。もうその目に涙は無かった。

漣「その……ありがとう。」

漣はそっぽを向いて、俺にしか聞こえないような声でそう言った。

智也「よし！じゃあ俺達も行こうぜ！！」

そう言っただけ俺たちは海へと繰り出して行った。

合宿？

智也「悪いな、待ったか？」

律「トモ遅いぞー！」

唯「早く早くー！」

という訳で、俺たち軽音部一同は昼間は思いっきり遊ぶことになった。

俺も当然のように水着に着替えて、

田井中たちの待つ（先に遊んでいましたが）海岸に来たのだ。ちなみに、秋山はまだ準備が出来ていないそうだ。

……………まあ女性は準備に時間がかかるらしいからな。

漣「お待たせー！」

数分後、ようやく秋山もここに来た。

律「あ！漣。じゃあ行こうぜ…って！！」

秋山を見るなり、田井中と平沢の表情がたちまち変わっていった気がする。

唯「漣ちゃん……」

律「喰らえええつつつ！……！」

田井中は傍にあつたビーチボールを勢いよく投げつけたのだ。投げたボールはそのまま秋山の顔面にクリーンヒット。

ビーチボールだから怪我は無かったものの、これが硬球とかだったら……と考えるだけでもゾツとする。

律「唯、泳ぐぞー!!」

唯「うん!!」

律「漣の裏切り者————!!!!!!」

そして、当て逃げするかの如く2人はそのまま海へと叫びながら消え去っていった。

明久も海の中に入り何かを唱えているし……

秋山「……痛い……」

智也「だ、大丈夫か秋山？」

俺は秋山を心配して振り向くと明久たちの理由がわかった。

正直に言っていると秋山はナイスバディでした。

……ヤバイ、体が急速に火照っていく感覚がした。

このままじゃ理性が飛んでいきそうだ。目のやり場にも困る。

…ジロジロ見てたら変態扱い間違いなしなので、とりあえず落ち着こう。

俺は漣の方から視線を逸らした。

漣「……けど綺麗なところだな」

智也「だな」

俺は視線を逸らしながらそういう。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして俺は田井中が持っていたモリを持ちながら魚を取っていると

律「おい、トモ〜！」

遠くの方から俺を呼ぶ声がする。

俺は魚を探すのをやめ声のする方へ泳いで行った。

唯「ねえねえ、何書いたの〜？」

平沢を見ると、

砂浜に描かれた鳥の地上絵の真ん中に顔だけ出して生き埋めにされていた。

他の4人は大爆笑している。

俺も思わず笑ってしまう。

智也「…………こ、これ、誰がや、やったんだ？」

俺は笑いをこらえ質問した。

律「ハハハ、私がやったんだ!!」

田井中がゲラゲラ笑いながらそう言った。

俺はそう思うと近くの木陰においてある荷物の中からカメラを取り出し

今の平沢の状況を写真におさめた。

明久「そういえば智也は何をしてたの？」

智也「ん？田井中が持ってたモリで魚とってた。見るか？」

俺はカゴの中に入っている魚などを見せた。

律「おおー凄いなートモ」

明久「これどうするの？」

智也「もちろん食べる。今日の晩飯になるかなと思い」

明久「まっいいか……」

その後はモリを置きカゴを海につけて逃がさないようにして皆と遊んだ。

そんなこんなでいつの間にか陽も暮れようとしていた。

夕日が水平線に沈みゆく

ありがちな感じだが、なかなかの絶

景だ。

…今日は本当に楽しかったなあ。

地上絵（？）事件に秋山が藤壺にやたら怯えていた事、さらにビーチバレーとかもしたりしたな。

唯「はあゝ海水飲んだゝ。」

律「辿り着いたぞゝ、黄金の島ジパング！」

そんな事言つて砂浜に仰向けで倒れこむ唯と律。

智也「俺たちずっと日本列島^{ジパング}にいただろ」

田井中の発言に俺のツツコミが華麗に炸裂。

漣「まだまだ…」

さっきから突然どこかに姿を消していた秋山も登場した。

律「おつ、いつの間に」

明久「スイカ割り？」

漣「…せっかく海に来たんだから思う存分遊ばないと、

ここまで来た意味が……」

そうだな。秋山の言うとおり……

智也・漣「あーーーー！練習ーーーー！！！」

律「忘れてたのかよ！」

そこで田井中のツツコミが入る。

漣「ま、まったく……律が『遊ぼー』とか言うからだぞ……」

律「一番楽しそうに遊んでいたのは誰だ……？」

田井中にそう言われると秋山はジト目をして田井中の方を見つめていたんだが、

「実は一番楽しそうに遊んでいたのは秋山だろ」とは誰も言わなかった。

……いや、言えなかった。

合宿？

律「ふう、美味しかったー」

紬「ご馳走様です、智也君に明久君」

漣「にしても2人とも。なかなかやるじゃないか」

智也「ふう、そりゃ良かった」

明久「喜んでもらえてなによりだね」

食べ終えた食器を片付けながら、俺はそう返答した。

今日の夕食は俺と明久が俺が昼間に捕まえた魚を使って料理した。

唯「でも本当に美味しかったね」

平沢の発言に対して全員が「うん！」と頷いた。

…喜んでもらえたんなら嬉しい限りだ。

漣「じゃあ今から練習だな！」

漣が意気揚々とした表情でそう言った。

律「え」

唯「もうちょっとゆっくりしよーよー」

さっきまでハイだった2人は早くもだらけていた。

漣「昼間思いつきり遊んだら。夜はしっかり練習するぞ！」

智也「俺と明久は洗い物だけしてから行くわ」

紬「え…でも、それじゃあ2人に何だか悪いわ。

私も手伝いましょうか？」

智也「いいいいいよ。気にするなよ。

そののだらけきった2人を連れて準備してもらっていいか？
すぐに行くから」

それに高そうな食材と食器を使ったせいか、
心なしに罪悪感があったりするし……

紬「……それじゃあ、お願いします。」

そう言つて、秋山たちは一足先にスタジオへと向かった。
俺と明久も腕をまくり、台所へと向かった。

……

智也「よし、お待たせお待たせ。

さあ練習始め……って、何だコレ？」

洗い物終え、ギターケースを持ってスタジオに入った俺の目に写ったものは床の上で寝そべっている平沢と田井中の姿だった。

完全にココで寝ようとしているのがよく分かる。てか、下手したら寝てる。

漣「練習始めるぞ!!」

紬「2人とも起きて!!」

明久「2人とも練習しようよ」

智也「…コイツらずっとこんな調子なのか？」

俺は注意する2人に一応聞いてみた。

…案の定頷かれました。

明久「…どうするの？」

漣「ムギ、智也、明久…ちょっと退いてて」

そう言うと、秋山はは自分のベースと繋いでいるアンプを寝ている2人の近くに勢いよく叩きつける。

未だに2人の返事はない。
秋山はそれを確認すると。

…次の瞬間、スタジオ内に爆音が走った。
爆音といっても、アンプに繋いだ漣のベースの音なんだが。
……とうの平沢と田井中はというと、
その爆音を至近距離で聞いて完全に起きた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

秋山と俺は練習の準備中。

一方、平沢と田井中は完全にやる気なし。

律「なあゝ、今日はもう止めにしようぜ。」

何も練習せずに合宿1日目を終えるってのはいかななものかと思うが。

漣「練習が目的でココに来たの！」

律「そりゃそうだけども……。」

漣「そういえば律……最近ちょっと太ったんじゃないか？」

特にお腹のところとか……最近ドラム叩いてないからかなあ。」

練習させる為についに田井中を弄り始めた秋山。

それを真に受けた律は狂ったかのようにドラムを叩き始めた。
さすが秋山だ。さてこれで安心して練習に励める。

かと思えば……。

唯「もうギター持てない……。」

澪・智・明・紬「……えええっつ！」「」「」

唯「だってこのギター重いんだもん……。」

智也「だから軽い奴にしておけって言つたのに……」

唯「誰だー、このギター買うつて言つたのは!？」

智也・澪「お前だ!!」「」

……

唯「そろそろ床暖まってきたね。」

律「ああ……。」

…結局、努力虚しく2人はさっきの状態に戻ってしまった。
いや、床の冷たい箇所を転々とゴロゴロしているからさっきより状態は酷いな。

紬「服…汚れちゃうわよ」

唯「アハ、またひんやり……」

せめて人の話を聞けよ。

漣「そんなんで学園祭どうするつもりなんだよ……」

律「だーからー、メイド喫茶がいいって言ってんだろ」

唯「お化け屋敷だよー」

明久「でもクラスの模擬店だつてあるよね……」。

模擬店2つも抱えるなんて無理じゃないかな？」

そう、俺たちのクラスや秋山たちのクラス、

明久たちのクラスも模擬店を出すことになっているのだ。

確か俺らは焼きソバ売って話になっていたな……

明久と秋山たちのクラスは……後で聞けるか。

律「でもさ……漣を見てみるよ。」

漣ほどメイド姿似合う奴なかないぞ」

漣「な、何よ……」

律「黒のストッキング、純白のエプロン、そしてメイドカチューシャー……」

『萌え萌え〜キュン』なんて言ったりしてな……」

智也「……最後の台詞はともかく、秋山にメイドは似合いそうだな」

唯「可愛いかも……」

律「　　なんてな、冗だ……」

ゴッソッ！！

…恐らく今シーズン最強の鉄拳が律の頭に飛んでいった。
田井中は完全にKO。

合宿？

練習はひとまず中止

キャンプファイアーの音がメラメラと聞こえる。

俺たちかというと、外に出て潮風を浴びながらひと時を過ごしていた。

智也「…にしても、本当に良い所だな。」

俺はスイカをかじりながらふとそう言った。

漣「そうだな。……にしても、終わったらちゃんと練習するからな」

律「わかってるって！」

律はそうウィンクした…不安だが、信じてやることにしよう。

紬「うん！」

紬もそれに続いて頷く。あれ、そういえば唯がないような……。ま、いずれひょっこり出てくるだろう……そう思っていた矢先だった。

明久・紬「「せーの！！」」

…ん、何が始まるんだ？

いきなりの展開に戸惑っていた刹那、前方からは花火が噴き出した。

そして花火と同時に1人のシルエットが映し出された。
まるでライブ会場にいるようだった。
そしてそこにいるの平沢だった。

唯「それじゃあ最後の曲、行つくぜえー！！！」

…そう言うとき唯はピックを弦にかけた。そして。

唯ソロでの演奏が始まった。

…驚いた。本当にきちんと弾けている。

、
演奏の間、無限の花火が舞台を彩っていた。
…気付けば鳥肌が立っている俺がいた。
この演奏に痺れた。感動した。

唯「オーイエー、オーイエー、オーイエー！ってアレ？もう終わり
…」

明久「予算が…」

紬「いつかまた…」

律「そうだな、武道館公演で派手にババババーンと……！！」

唯「武道館…？」

律「オイオイ、目標はそこだって決めただろ……な！」

田井中は秋山に向かってそう言ったのだ。

そういえば、『目指せ、武道館ライブ!!!』なんて格好いいこと言ってたっけな。

智也「……なあ秋山。俺たちの思った通り……いや、思っていた以上だ。

軽音部は」
ウチ

漣「その言葉……分かる気がする。」

智也「このまま本当に武道館ライブまで行っちゃうかもな、俺ら」

漣「ホント……武道館目指すなら、まずこの位はできる様にならないとな」

秋山がそう言うと、ラジカセを取り出した。
再生ボタンを押すと、今朝朝と同じようにノリのいい音楽が流れ始めた。

律「へえ、上手いな」

田井中はそう言えばあの時さっさと遊びに行ってたっけな。

唯「でもこの曲……」

ん？この曲に何かあるのか？
そう思った刹那……

『お前が来るのを待っていたああ……!』

このフレーズの後、何とも言えないクレイジーな叫びがラジカセか

ら聞こえた。

漣「聞えない聞えない聞えない聞えない……」

断末魔の叫びを一番近い位置

（持っていたラジカセから流れたので必然的にそうなる）で聞いていた秋山が

しゃがみ込み耳を塞いでスキルを発動させた。

律「ニヤッ」

そんな秋山を見てわざわざ声にだしてニヤリとする田井中。

智也「…何するつもりだ？」

律「ちょっとな」

俺の言葉を曖昧に返し、嬉々と秋山に近付く。

漣「聞えない聞えない聞えない……」

律「ふじつぽ」

漣「キヤーツ!!」

律「膝の皿屋敷……」

漣「イヤだ〜！イヤ〜！イヤだよ〜……ううう……」

智也「あゝあ……」

田井中の呪いの囁きによって俺達に背を向け、遂に泣き出してしまった。

智也「おい、田井中やりすぎだ」

唯「本当だよ」

律「…あ、ゴメン…悪かったな」

明久「大丈夫だよ秋山さん」

紬「澪ちゃん大丈夫だからオバケなんかじゃないわ」

澪「…ほんとお…?」

秋山がこちらを向いた。

唯・律「「キュルルリ〜ン!」」

秋山の泣き顔プラス潤んだ瞳を見てときめく平沢と田井中。

琴吹も若干頬が赤い。俺と明久は咄嗟に顔を背けた。

正直言つと今の秋山は凄く可愛いかった。

唯・律「「萌え萌え〜キュン!」」

これが今のこの2人の心境らしい。

合宿編？

律「ゴメンな〜漣〜」

漣「ぶう〜」

あの後、泣きやんだ秋山と昇天しかけてる3人？を促しスタジオに行き、

練習再開と思いギターを軽く弾いていると…

〜

俺のギターからではない所から同じ音が聞えた。

智也「ん？」

どこからだと思い視線を巡らせると…

唯「エへへ〜トモ君のマネ〜」

弾いていたのは平沢だった。

紬「唯ちゃん、でも本当にさっきの曲…」

唯「うんっ！見てて〜えーっと…」

〜

紬「うそ…」

智也「……」

平沢がギターを弾く。

そこは別にあまり問題はない。…その弾いてる曲が問題だ。

平沢が奏でている曲は先程外で流した昔の軽音部のギターパート。

スピードなどは遅いが、それでも音程を間違える事なく弾いている。

まさか…
智也

唯「はいっ！どう？」

紬「すごい！完璧」

唯「エヘヘ…どうだったトモ君？」

智也「……」

唯「トモ君？」

明久「どうしたの智也？」

平沢が感想を求めてくるが俺はある可能性を考えていた。
その可能性を確かめるために口を開く。

智也「…明久」

明久「なに？」

智也「今から適当にキーボードを軽く弾いてみる。んで平沢」

唯「なに？」

智也「明久が弾いた音をギターで再現してみて」

唯「？…わかった」

漣「なにするんだ智也？」

智也「実験だ」

漣「実験？」

智也「ああ…明久頼む」

明久「う、うん」

）

キーボードから音、そしてそれを…

）

見事に再現。

漣「智也……」

智也「ああ……」

秋山が俺と同じ考えに達したらしい驚愕の表情をして俺の名を呼ぶ。

律「おお～すげ～な～唯！全く同じだ！」

唯「エへへ～ありがとう」

紬「ゆ、唯ちゃん！今から出す音、当ててみて！」

唯「う、うん わかった」

琴吹も気付いたようだ。

興奮した様子で平沢に提案する（田井中と明久は気付いてないらしい）

紬「これは？」

唯「ラ」

紬「じゃあこれは？」

唯「ソ」

紬「…これは？」

唯「ミ」

紬「……」

智也「どうだった琴吹？」

惚ける琴吹に問い掛ける。

琴吹の答えによって俺が平沢に感じてる可能性が確信になるだろう。

紬「全問正解…」

律「えっ？ 唯、お前…」

明久「平沢さん……」

確信になった。

そして明久と田井中も気付いた様だ。

皆「……ジー……」

唯「なに？なに？どうしたのみんな？」

俺達が一斉に平沢を見る。

1人分かってない平沢がキョロキョロと俺達を見る。

智也「平沢『絶対音感』持ってるな」

唯「ええっ！？『絶対音感』！！…ってなに？」

理解出来なかった。

律「知らんのかいつ！！」

唯「はあ…」

部長渾身のツッコミ。

しかし『絶対音感』を持つてるのなら納得がいく。

俺の真似やギターパートのコピー、

これらを一度聞いただけで音程を間違えず再現するなんて

『写○眼を持つコピー忍者』か『絶対音感』を持っている以外有り得ないからな。

漣「…っていうのなんだよ『絶対音感』は」

唯「へえーそうなんだーすごいね漣ちゃん！

色々知ってるんだー！」

漣「いや、すごいのは唯の方なんだけど…」

まあ本人が余り理解してないので宝の持ち腐れな気がするが……

唯「でもみょーんってところが分からないんだよね。」

絶対音感を『へえ』程度で受け流すっていうのは、
すごいのか天然なのかどっちだ？

漣「それってたぶんチョーキングのことだと思うよ。」

秋山がそういうと田井中が平沢にチョークスリーパーをかけた。

智也「ソレ全然違うからな」

明久「え？じゃあなにそれ？」

智也「チョーキングっていうのは音を出しながら言を引っ張ること
だ」

俺は実践してみせる。

唯・律・明久「「おおー！」「」」

智也「じゃあ、やってみろ」

唯「うん」

平沢はみょーんという音を弾くとくすくす笑い出した。

唯「ふふふ、あはははは。なんかこれ変。」

何だ、ツボにはまったのか？
変なところにツボがあるな

律「ツボだったみたいだな」

田井中も理解しているようだが、
秋山はツボという言葉を受けてふじつばを思い出したのだろう、
再びうずくまってしまった。

合宿？

俺がふと時計を見上げるともう11時を回っていた。

智也「おーい、みんな。練習もいいけどさ、

そろそろ風呂に入ったほうがよくないか？」

その言葉を受けみんな時計を見る。

漣「あ、確かに。じゃあそろそろ風呂にでも入るか」

唯「そうだね」

明久「じゃあ、みんな先に入っていよいよ。」

明久は一応レディーファーストという言葉を実行する。

紬「あ、そのことなんですけど、

この別荘には露天風呂が男性用と女性用で2つありますよ。」

琴吹が解説してくれる。

それにしても露天風呂が2つって・・・もう凄えとしか言えねえ・・・

カポーン

壁の向こう側から女子の声が聞こえてくる。

律「おーい、そっちはどうだ？」

田井中が壁の向こう側から聞いてくる。

明久「ちょうどいい位の湯加減だよ」

智也「それにしてもまさか露天風呂まであるなんてな」

明久「今日はほんとに楽しかったね」

智也「楽しかったっていうけど、これ本当は合宿できてるんだぞ。」

明久が本来の目的からずれたことを言ったので一応訂正しておく。

明久「わかってるよ」

智也「本当か？お前は調子が良いからな」

明久「大丈夫だよ。僕だってやる時はやる……………はずだから」

智也「はずじゃねえよ！やれよ」

俺は明久と談笑しながら風呂に入っていた。

智也「じゃあ、そろそろ俺は上がつとくから

お前らも話に夢中になってのぼせないようにしろよ」

俺は壁越しに女子にそう告げ風呂から上がる。

明久も俺に続いてあがってきた。

さてと、俺は一足先に上がって自主練でもしときますか。

それから女子たちが上がってくるまで明久と曲作りに励んだ。

女子が上がってきてからは居間でトランプなどをしているのだが……

智也「はい、俺あがり。なあそろそろ寝ようぜ。

そろそろ日付が変わるぞ。」

律「まだまだ。トモが負けるまでだ!」

明久「そつだよ智也。勝ち逃げはダメだよ」

俺が極端に勝ってしまったせいで変に田井中と明久がやる気を出してしまい一向に終わらない。

ちなみに今のところの成績はババ抜きで5回連続トップ、大富豪で3回連続トップという今日だけで

1年分の運を使い果たしているんじゃないかというくらいの状況だった。

そして周りを見ると平沢と秋山は寝落ちしていた。

智也「ほらよく見る平沢と秋山はもう寝てるだろうが」

律「まだ、トモは大丈夫だろ」

智也「大丈夫じゃない。俺も正直眠いんだ。

もう何が何でも終わるぞ。

明久は平沢をベットまで運んで行ってくれ。

俺が秋山を運んでいくから」

律「おっ？いいのか？」

智也「良いも悪いもお前と琴吹に任せてもいいけど大変だろ。

それに琴吹も限界そうだしな」

俺が琴吹を見てそういうと

琴吹は目をもうほとんど閉じているような状態だった。

律「じゃ～お願いするわ。

ムギ～ここで寝るな～ベットまでいくぞ～」

智也「じゃあ、明久は平沢を頼むな」

明久「了解！」

そして俺と明久は秋山と平沢を抱えベットまで運び、
軽く部屋を片付けてから就寝した。

合宿？（後書き）

合宿1日目終了

合宿？

（翌朝）

普通ならさわやかな目覚めといきたかったのだが、
なぜか大量にセツトされた目覚まし

（後で問いだしたら田井中が仕掛けた）によって
大音量に起こされ自然と不機嫌になってしまった。

ちなみに明久は俺より先に目覚めていたので被害は受けなかった。

漣「おはよう智也」

秋山が声をかけてきた。

智也「……………ああ、おはよう」

漣「どうかしたのか？」

智也「……………何でもない」

漣「そうか？まあとりあえずみんなそろったことだし朝ごはん食べ
るとしよう」

律「そうだぜ。朝ごはんは食べないと元氣が出ないからな。
ってわけでございます」

皆「……………いただきます」

田井中が先に1人で先に食べ始めたのであわてて
みんなも手を合わせて食べ始めた。

智也「それで、今日の予定は？」

俺はこの合宿の取り締まりである秋山に尋ねる。

漣「当然今日はお昼までみっちり練習だよ」

律「え、せつかくリゾート地に来たんだから遊ばうぜ」

唯「そうだよ漣ちゃん。せつかなんだから」

田井中と平沢は練習に反対する。

漣「ダメ！昨日は遊び過ぎちゃったから今日はちゃんと練習するの
！」

律「じゃあ、漣は遊びたくないんだな」

漣「そ、それは・・・」

答えに詰まる秋山。

まあ遊びたいんだな。

智也「それじゃあ、11時まで練習して帰る2時までは自由行動で
いいんじゃないか？」

今の時間は午前7時これから身支度したところで練習始めるのは8
時には大丈夫だろ。

だから、練習時間は3時間。

それだけあれば十分だろ………今は

漣「ああ、それでいいんじゃないか」

心なしか嬉しそうな顔をしている。

やっぱり遊びたかったのか。

結果、練習は大成功だったと思う。

一応ちゃんとみんなそろっていた。

漣「やっぱりまだまだ完璧じゃないな」

秋山が感想を漏らす。

智也「でも少しずつは出来ているんだから今はこんなもんじゃないか？」

漣「でも、やるならもう少し上を狙ってみたいかな」

智也「それはな。まあそれは部活中にな」

漣「そうだな。じゃあそろそろ遊ぶか」

そういつて秋山は自分の楽器を片づけ始める。

智也「遊ぶのもいいけど程々にしとかないと帰る時間忘れるぞ」

澪「大丈夫、大丈夫」

その後1時半まで遊び片付けてから帰宅した。

合宿？（後書き）

これで合宿編は終了です。

夏休み最終日

明久・陽一「助けて智也！」

本日8月31日、学生にとっては夏休み最終日である。

智也「嫌だ。自業自得だ」

そんな日にバカたちが俺の家に訪ねてきた。

明久「そんなこと言わないでよに頼むよ。」

今年は合宿とかいろいろあつて忙しかつただもん」

今、俺が頼まれているのは夏休みの課題を手伝えというものだ。

智也「そんなもん言い訳にならない。」

つてか明久と俺は同じ部活だからそれはわかるけど、

俺はちゃんと終わらせてある。

で、陽一にいたつては完全に自業自得だろ」

ちなみに俺の家には明久と陽一の他に、

雄二と秀吉、康太の計5人が来ていた。

俺を含め6人もいるので今は居間に上がっている。

勝手に上がりやがった。

智也「秀吉を見習えよ。秀吉だつてちゃんと部活に出ながら

課題を終わらせていつてるだろうが！」

秀吉は課題をあと2つとまで終わらせていたのだが、

雄二は半分ほどだけ終わらせていた。

そして残りの3人はほとんど手付かずだった。

智也「ってか何で雄二は半分しかやってないんだよ」

雄二「途中でめんどくさくなった」

陽一「マジで頼む。明日なんか奢るから」

康太「……………頼む。力を貸してくれ」

智也「だから、嫌だって。めんどくさいし」

明久「じゃあせめて答え写すだけでも…………」

3人はやけにしつこく頼んでくる。

雄二に至ってはやる気すらなし。

秀吉はその間に少しずつ終わらせていつている。

智也「あゝ分かったよ。そのかわり貸し1だからな」

明久・陽一「イヤッホー……ッ!!」

康太「……………（グッ）」

雄二「じゃあ、見せてもらおうかな」

智也「おい、雄二もかよ」

雄二「こいつ等が課題を出すんなら俺も出すさ」

……まったくやれやれだ。

今の時間は午前9時。（課題完了率0%）

宿題の量、半端なかったけど間に合うのか？
まあ間に合わなくても俺には関係ないか。

俺が冷蔵庫から飲み物を取り出し

一応皆に配ろうと居間に戻ると陽一は携帯でどこかに電話していた。

陽一「ん。そうだよ。お願いね。じゃあまたあとで」

智也「また後でってことは誰かをここに呼んだのか？」

陽一「おう、ちょっと助っ人を。あ、でも心配するな。

別にお前の知らないやつじゃないから。むしろよく知ってる
人たちだ」

俺は呼ばれた人物について考えを巡らせた。

俺がよく知ってるってことは中学の頃仲良かったやつか？

それとも、今のクラスメイトか？

つてか俺の家なのに俺の承諾なしでかこのやろう……

陽一「おい智也。早く出してくれ。

あんまりのんびりできないから」

陽一「たちにせかされた俺は現実に戻ってきた。

智也「ああ、悪い。ホイ、これ。」

俺は自分の夏休みの課題を放る。

……コイツなにさまのつもりだよ

（約30分後）

ピンポン

チャイムが鳴った。

陽一「お、来たかな？」

智也「だから誰だ？」

陽一「まあいいから。玄関開ければわかるんだから」

俺はインターホンにつながっている受話器を取った。

そこから聞こえてきた声は……

唯「ヤッホー、トモ君。私だよ。唯だよ」

平沢の声だった。

さらに、

漣「あ、唯だけじゃなくて私たちもいるよ」

秋山の声まで。

しかも私たちってことは……

ドアを開けるとそこにいたのは、軽音部のみんなだった。

律「よっトモ。あたしたち、春原に頼まれてきたんだけど」

そうか陽一のやつが呼んだのはこいつらだったか。

智也「ああそうか、まあ上がってくれ。」

まあ他のヤツらもいるが気にしないでくれ」

律「それじゃあ、遠慮なく」

田井中と平沢が先導を切って本当に遠慮なく上がってきた。

そしてみんなを居間に案内し、俺は台所でお菓子などを用意する。

まあ人数が増えたんだから俺がやらなくても今日中に終わるだろう。そう思い居間に戻ると、みんなそれぞれ課題を写しにかかっていたのだが、

漣「ああ智也。ありがとう。」

それと悪いけど智也も手伝ってくれないか？」

笑顔で切り出した秋山。

智也「……なんでだ？」

ってかその人数居れば俺が手伝わなくても大丈夫じゃないか？」

漣「律と唯も課題まだみたいでついでにと思つてきたみたい。
だから実質7人分なんだ」

なるほど、そういうことだったか。

おかしいと思つてたんだよ平沢と田井中が遊ばずに手伝いに来るなんて。

智也「……ああ、分かったよ。手伝うから。

……せつかく久しぶりにゲーセンにでも行こうと思つてたのに……」

漣「ありがとう智也。じゃあ、あんまり時間無いから集中していくぞ」

そついい秋山も話さずに課題を黙々と移し始めた。

ちなみに秋山と琴吹が平沢と田井中に、

俺が残り5人ということに……あれ？俺の負担でかくないか？

まあ秋山は人見知りするタイプだし仕方が無いか？

それに秀吉はもう終わりそうだし、雄二もなんやかんやいいながらペースが速いからな。

……問題は明久と陽一と康太の3人だな。

（午後1時（課題完了率40%））

今は7人分の課題を10人で集中してやってるわけだから1人でやるより早いスピードで課題が片付いていく。

グウ

誰かの腹の虫が鳴った。

智也「そういえばもうこんな時間か。」

みんな、そろそろ昼ごはんにしないか？」

俺が提案すると、

紬「うん。お願い智也君。わたしもうお腹ペコペコ」

律「そうだな。ちょうど私もお腹減ってきたところだしな。」

雄二「俺も腹が減ってきたな」

明久「僕もだよ」

漣「それじゃあ私もお言葉に甘えて」

みんなそれぞれの言い方だが賛成を示す。

智也「わかった。じゃあなんかぱつと食べられるもん作ってくるわ」

おにぎりでも握ってくる」

漣「あ、待って。私も手伝うよ。」

紬「それじゃあ、私も手伝わせてもらってもいいかしら？」

律「あ、漣もムギもずるい。あたしも・・・」

明久「僕も手伝うよ」

智也「お前らは自分の課題やっつけ。

じゃあ、秋山と琴吹は手伝ってくれ。」

明久と田井中に釘をさしておき秋山と琴吹が手伝うと言ってくれたので

素直に手伝ってもらうことにする。

そういつてある程度の量のおにぎりを作った。

そして課題の写しをやっているはずの7人の元へと向かった。

智也「おにぎり作ってきたぞ。っておいおい」

中に入ると5人はぐったりしながらおしゃべりをしていた。
雄二と秀吉は真面目に取り組んでいたが……

陽一「疲れた」

明久「オナカヘッタ」

唯「あ、慧君、澪ちゃん、ムギちゃん。ありがとう」

平沢のお礼の言葉にもややいつもの調子がない。

智也「課題写すだけで脳を使い過ぎたのか？」

唯「うん。そうみたい」

より一層ぐつたりとする平沢。

智也「で、平沢は別として陽一。

お前はこんなもんじゃぐつたりするはずないだろ。」

陽一「おう。でもこの4人がぐつたりしてるから流れで僕もな。

どうせお昼ご飯の間は休憩なんだから問題ないだろ」

智也「はいはい、じゃあとつとと食べて、さつさと課題終わらせるぞ」

持つてあがってきたお皿を机の上に置いた。

みんな本当にあせっているのかテキパキと食べて課題に取り掛かる。

こんな調子で部活されたらのんびりできないから困るな。

などと考えながら俺も食べ終わり課題の手伝いに入った。

（午後3時（課題完了率55%））

周りを見渡すと田井中と琴吹と平沢、康太、陽一の5人が眠そうな顔をしている。

秀吉と雄二はすでに自分の課題を終わらせ明久たちの課題を手伝ってもらっている。

智也「なあ、みんな一回休憩しないか？」

俺がそう持ちかけると、

「だめ！」

「しよう！」

2つの声に分かれた。

ちなみに先の「だめ」のほうは秋山1人で、
あとの「しよう」は残りの全員だ。

漣「おい、みんな！そんな暇ないだろ！まだ半分くらい残ってるの
に」

休憩に傾きかけた空気を元に戻そうとするが、

律「えゝいいじゃん。休憩でもしないと集中力切れてきたし。」

紬「あ、私、ケーキ持ってきたの。みんなで食べましょ。」

琴吹のケーキという言葉で休憩が決まった。

唯「わーい、ムギちゃんのケーキだ。」

雄二「みんなってことは俺たちの分のケーキもあるのか？
俺たちは軽音部のメンバーじゃないのに良いのか？」

紬「ええ、もちろん。」

家にあっても余らせてしまうからみんなに食べてもらったほうがいいのよ」

雄二「そうか、ならいただく」

秀吉「すまぬの。いただくのじゃ」

皿を並べそこに琴吹がケーキを置いていく。

『いただきます。』

みんな一斉に手を合わせた。

唯「んゝ幸せ。このために生きてるって感じだよね」

明久「そうだねゝ幸せだよ」

智也「お前らの人生軽いな」

秀吉「これは本当に美味しいのじゃ」

康太「……………美味」

雄二「これは確かに美味しいな」

漣「これ食べ終わったら、ちゃんと課題するからな」

唯「大丈夫だよ」

律「そうそう。大丈夫だって」

どこからともなくあふれてくる自信がある平沢と田井中。

「午後8時（課題完了率100%）」

唯・律・明・陽「」「」「終わったー！」「」「」

紬「ふう」

雄二「疲れたな……」

秀吉「もうこんなことはコリコリじゃ」

漣「でもこれで安心だな」

智也「せつかくの夏休み最終日が……」

課題を片付けなければいけない人は喜び、
手伝わされた人は疲れた顔をしている。

陽一「いやゝ助かったよ智也」

明久「本当にありがとう智也」

智也「…………貸し1だからな」

そんなことしても夏休み最後の日は帰ってこないけどな。

漣「ま、何はともあれこれで一安心だな」

秋山は俺に比べたらまだまだ余裕だ。

律「やっぱりトモの家に来て正解だったな」

唯「うん。たぶん私と憂だけじゃ今日中に終わらなかったもん」

智也「受験生の妹に手伝ってもらったのかよ・・・」

俺はぼそりつつぶやいた。

秋山と琴吹はごそそと帰る準備を始めた。

智也「何だ、もう帰るのか？」

漣「ああ、もうそろそろいい時間だしな。

それにあんまり長くいると智也の家族にも迷惑だろ？」

智也「まあ時間なのは時間だけど別にそんなに迷惑じゃないぞ。

俺1人暮らしだしな」

雄二「1人暮らししか羨ましいなウチなんか・・・・・・・・・・」

雄二はそういつと遠い目をしていた。何があっただんだ？

紬「あら、そうなの。でも私迎えをもう呼んじやったからやっぱり帰らなくちゃ」

琴吹と秋山は帰るつもりだと思っただが、

唯「じゃあ、私はもう少し居ようかな」

律「お、じゃああたしも」

陽「僕も近所だからもう少し居るぞ」

明久「僕ももう少し居ようかな」

その他の課題が残ってた組の4人はまだ居座るようだ。

漣「こら、律。帰るぞ」

律「んゝそうだな。じゃあ帰るか」

田井中は秋山に言われるとあっさりあきらめた。

智也「平沢と明久と陽一はとっとと帰れよ。」

明日から学校再開なんだからとっとと帰って準備でもして早く寝ろ。

新学期初日に遅刻なんてするなよ」

唯「うゝ、もう学校なんて嫌だゝ」

学校ごと批判するというガキっぽいことをする平沢。

漣「ほら唯、そんなこと言っても学校はなくならないんだから。早く帰ろ」

唯「うゝ、仕方ないね。早く帰って憂にご飯作ってもらおうと」

みんなぞろぞろと俺の部屋を出て玄関に向かう。

智也「そんじゃ、まあ気を付けて帰れよ」

漣「ああ、じゃあ智也また明日学校でな」

漣がみんなの代表みたいな感じで言う。

漣「それじゃあお邪魔しました。」

皆「」「」「お邪魔しました。」「」「」

みんなは秋山に続いて小学生の帰りのあいさつのように声をそろえた。

智也「おう」

これでもう明日から新学期が始まっちゃうな。

あーもう、面倒だな。

顧問探し？

ミン… ミーン…

智也「アチィ…」

陽一「9月なのに何でこんなに暑いかね…」

智也「知るかよ…残暑だろ…」

本日9月中旬。

『どうした？』と地球に問い掛けなくなる様な暑さが続く。

夏休みが終了し、2学期が始まり、

学園祭に向け盛り上がる筈の我が文月学園は、

この暑さのせいでイマイチ盛り上がり欠けていた。

俺は暑さが苦手なので（寒いのも苦手）参ってるなかで、
陽一と廊下を歩いていた。
バカ

ちなみに今の時間帯は放課後。

本来なら部活に行ってるが、陽一が課題を全く同じに写してしまっていたので、

見事に担任から説教をくらい部活を遅刻中。

そして職員室からの帰りの廊下をダラダラと牛歩しているとところだ。

その時…

ガラッ

俺達の行き先にある教室のドアが開き、とある人物が出てきた。

和「あつ　中川君、春原君」

陽「おつ　和ちゃん！」

智也「…アチイ」

涼しい顔をした真鍋だ。

陽「何でこんなところから、和ちゃんが出てくんのだ？」

和「何でって、ここ生徒会室よ？」

陽「な又！？」

そう言われ、教室名が書かれているプレートを見上げる。

【生徒会室】

陽「わあゝお…」

智也「ここにあつたんだな…生徒会室…」

和「入学して五カ月経ってるわよね…」

真鍋が呆れ声と共に俺達を見ってくる。

仕方ないだろ…生徒会なんてそんな堅苦しい空間、用もなければ行かないし。

場所なんて知らなくて当然だろう。

和「てゆうか中川君、なんて格好してるの?」

智也「…ん…?」

俺を爪先から頭のとっぺんまで見て、やはり呆れたような感じで言ってくる。

只今の格好。

夏用の制服。

ズボン。 脛ぐらいまで捲り上げ。

シャツ。 ボタン全開。 中に着ているTシャツを露出。

右手。 安物扇子。

中川智也 現在で出来限りのクールビズ中

智也「…何か問題でも？」

和「ちゃんと着なさいよ制服」

智也「…クールビズです」

和「やり過ぎよ…」

だったらこの暑さをなんとかしてほしい。
地球に気温を下げるように懇願してちょうだいな。

ちなみに陽一は普通に制服を着用している。
バカのくせに…

和「まあ、良いわ。今から軽音部に行こうとしてたから
…智也、ちょっと時間良いかしら？」

智也「…別にいいけど何？」

和「軽音部について重要な話があるの」

智也「重要な話？」

和「ええ だから中で…」

智也「？」

そう言つてチラッと陽一を見る。

ああ…邪魔なんだなコイツが。

軽音部について重要な話だから部外者の耳に入っちゃマズイしな。

智也「陽一、ハウス」

陽一「俺は犬か！」

智也「じゃあ、お前ん家の近くの公園で1人でカバディでもしてろ」

陽一「何でそんな寂しい事しなきゃいけないんだよ！

つかハタから見たら変人じゃねえか！」

智也「だからだよ」

陽一「誰が変人じゃー！」

智也「おっ、陽一窓の外に可愛い女子高生がいるぞ」

陽一「どこー!？」

智也「ほら、アソコ。今行けば話ぐらいできるかもよ」

陽一「マジか!？智也ありがとう！すぎに行ってくるぜ!！」

陽一はそういうと駆け出していった。

俺の嘘とか気づかず。

さて…邪魔者は去ったな…

和「じゃあ、お話ししようか」

智也「了解」

真鍋は普段どおり冷静に対処し俺を生徒会室に入れてくれた。

.....

軽音部の重要な話を聞くために初めて生徒会室に足を踏み入れる。
真鍋以外は誰もいなかったらしい。

普通の教室とあんま変わらんな…

和「単刀直入に言うわね」

俺が適当な席に座ったのを見計らって真鍋が切り出した。

智也「ああ」

和「軽音部は部として認められてないわ」

智也「……………はあっ!?!」

こついう事である。

今なんて言った?

軽音部が部として認められてない?

なんでだ?

智也「どういう事だよ？」

部員4人揃ったら部として認められるんじゃないかよ？」

確か誰かがそう言ってた筈だ。

だから平沢が入部した事によつて廃部は免れた。

それに俺と明久も入部したから6人だ。

既定人数が足りないってことはない筈だ。

和「うん そうなんだけどね…」

智也「つかなんで、真鍋がこの事知ってたんだ？」

いくら生徒会の一員だとしても、真鍋はまだ1年だ。

こういう事は三年とか生徒会長が幹旋するもんじゃねエのか？

そして何故、軽音部が部として認められてない事を知っているのか？

生徒会には何でも情報が入ってくるのか？

ここにはヴェ○ダでもあるのか？

和「ああそれはね、軽音部の誰かが学園祭のステージを

借りるために職員室に来たみたいなの」

智也「誰か？」

和「それは分からないけど…そこで部として認められてない事が分かったみたい

それで生徒会にも連絡がきて、ちょうど私しかいなかったから私を取り合つたの」

智也「なるほどね…」

納得だ。ヴーダじゃなかったか。

智也「で？結局原因はなんなんだ？」

和「部活申請用紙が出てないからだと思っわ」

智也「部活申請用紙？」

和「ええ、コレよ」

そう言って棚から一冊のファイルを取り出し、俺に渡す。

智也「……」

それをパラパラとめくっていく。

そのファイルの中には、『クラブ活動申請書』という紙が何枚もあった。

『茶道部』『演劇部』『吹奏楽部』『合唱部』『美術部』：etc.
様々な部活の用紙があるが『軽音部』のものは見当たらなかった。

智也「…ねえな」

和「それが提出されてないと人数が集まっても

部としては活動出来ないの」

智也「…じゃあ何か？今まで俺達は勝手に準備室を使ってたって事か？」

和「そうなるわね…」

それはまあ、あんだけ私物（ティーセット等）を持ち込んで何も言われなかったもんだな。

和「申請用紙は生徒会からその部の部長に渡した筈なんだけど…」

智也「えっ？」

今、聞き捨てならない言葉があつたな。

『部長に渡した』

軽音部の部長は田井中だ。アイツ出してねエのか…？

和「軽音部の部長って誰なの？」

『田井中だ』と口を開こうとした時…

バンッ！

唯「たのもーっ！！」

律「部長は私っ！！」

生徒会室のドアが勢いよく開き、

何故かポーズをキメる平沢と同じくポーズをキメめ、
タイミング良く部長を名乗る田井中と…

紬「失礼します」

正しい入室作法の琴吹が入ってきた。

智也「あれだ」

和「ああ……」

田井中を指差す俺。苦笑いの真鍋。

唯「あれ？和ちゃん？」

律「それにトモもいるし」

唯「あつ本当だ〜トモ君に和ちゃん、なんでここにいるの？」

智也（俺はともかく真鍋は当然だろ。前言ってたじゃねえか）

が、その考えは甘かった…

和「なんでつて…生徒会に入ってるからだけど？」

唯「えっ！？すごいね！流石、和ちゃんだよ！」

和「生徒会に入ってたって言った筈なんだけど…」

唯「あれ？そうだったけ？」

忘れていたんだな……

律「お前ら本当に幼馴染みか…」

田井中がポツリとツツコんだのを心の中で同意した。

紬「智也君はどうしてここに？」

智也「…ん？」

俺が田井中の発言に心の中で同意し拍手を送ろうかとしていると
琴吹に話しかけられた。

律「ま、まさかトモ…生徒会に引き抜きをされてたんじゃ…！」

唯「ええっ！？だ、ダメだよ和ちゃん！

トモ君は軽音部なんだから、いくら和ちゃんの頼みでも、
それは聞けないよ?!」

和「なんの話？」

智也「気にしないほうがいいぞ」

顧問探し？

和「さつき中川君にも説明したんだけど、部活申請用紙が提出されてないから」

軽音部は部として認められてないの」

訳の分からん誤解をしている平沢と田井中をほっという
琴吹に何故生徒会に来たか尋ねると、
軽音部問題（長いのでこれで統一）が琴吹達の耳に入り
真相を確かめるために生徒会にきたらしい。

あと、秋山は部室でスキルを発動中らしいので置いてきたとのこと。
明久は秋山を落ち着かせるため残った。
ちなみに俺がここにいる理由は説明済み。

律・唯・紬「部活申請用紙？」

真鍋の言葉を聞き、未だに何か言ってた平沢と田井中が本題に戻り、
琴吹と3人で声を揃える。

律「そんな話は聞いてないぞー！」

智也「聞いてないじゃねエよ！お前に生徒会が渡した筈だ。どこやった？」

律「…いや、そんなもの、貰った記憶が…」

漣「貰ってるだろうー！」

智也「おっ…秋山…」

すっとぼけた事を言う田井中にどす黒い怒りのオーラを纏った秋山登場しツツコむ。

律「ん？……………あっ！！思い出した！

そういえば部室の机の中に、入れっぱなしだ！」

漑「やっぱりお前のせいかなぁっ！！」

律「イダダダッ！！ゴメンナサイ！！」

紬「漑ちゃん、りっちゃんにも悪気があった訳じゃないし…」

智也「そりゃそうだ、これで悪気があったら、ある意味大物だ」

漑「ムギは甘いんだ！智也も訳の分からん事言わない！」

智也「とばっちりかよ…」

紬「まあまあまあまあ…」

唯「6回」

明久「6回とか数えてる場合じゃないよね」

そんな様子を見ていた真鍋はボソツと。

和「なんていうか、軽音部って唯にピッタリだと思うわ」

唯「え？」

言われた意味を呑み込めていない平沢の頭の上には？マークが飛び交っている。

智也「だろうな。こんな部は他にはないと思うな」

和「まったくその通りだわ」

そついい真鍋はため息を一つつき、仕方ないといった顔になった。

和「…しょうがないわね。私がなんとかしてあげるわ」

「」「」「本当っ！？」」「」

真鍋の鶴の一声で喧騒が止み、有望な様子で真鍋を見る5人。

智也（さすが真鍋だな。頼りになるなあ）

真鍋が申請用紙を取り出し、必要事項を記入していく。

和「軽音部つと…部員は6人……で、顧問は？」

唯・律・漣・紬「」「」「顧問？」「」

明久「ん？」

智也「そついや顧問見たことなかったな……」

和「あなた達…」

用紙から顔を上げ、そんな事を言う真鍋。

和「とにかく顧問がいないと、申請用紙は提出出来ないわ」

律「じゃあ、さわ子先生に頼んでみようぜ」

智也「お前：そんな楽観的に言うなよな」

漣「そもその原因は律だろ」

明久「でも先生って吹奏楽部の顧問やってなかったっけ？

引き受けてくれるのかな？」

明久の疑問も最もだ。

吹奏楽部と軽音部の顧問の掛け持ちなんて簡単に了承してはくれないだろう。

ましてやコッチは少人数の弱小部だ。

吹奏楽部が何人いるのか知らんが、間違いなくウチよりも多いだろうし、

コンクールで賞とか取ってそうな（推測）強豪の吹奏楽部と廃部寸前だった軽音部。

軽音部の顧問をやるメリットなんてないしな。

紬「とりあえず、山中先生に聞いてみましょう？」

漣「そうだな：他に頼れそうな先生いないし…」

智也「俺達の担任は？」

和「あの先生はオカルト部の顧問よ」

唯「和ちゃん何でも知ってるね」

和「自己紹介の時言ってたじゃない…」

智也・唯「あれ？そうだったけ？」

和「聞いときなさいよ…」

そんな人生で何の役にも立たなさそうな情報、一々覚えてねえよ。
つかオカルト部って…

智也「明久の担任は誰だったけ？」

明久「……鉄人だよ」

唯「……鉄人？」

澪「そんな名前の先生いたか？」

智也「……マジか？あの筋肉教師だったのか」

明久「うん、そうだよ」

智也「よし、他の先生にしよう！」

明久「もちろんだよ！あんなのが顧問だと僕耐えられそうにないよ
！」

智也「それは俺も同じだ！」

漣「どんな先生なんだ……」

律「じゃあさわ子先生に会いに行こうぜ？」

話がまとまった？ところで田井中が声をだし、生徒会室を後にし職員室に向かう事に。

顧問探し？

律「あつれー、いないなー。」

俺たちは、山中先生を探しに職員室まで来ていた。もつとも、職員室に入っているのは田井中だけだが。失礼しました、と言って田井中は職員室から出てきた。

律「なあ、唯。さっきまで山中先生いたのか？」

唯「うん。さっき、絆創膏もらいに来たときはいたよ」

指に張られた絆創膏を見せてくる。

智也「まあどっちにしろこの時間帯なら

まず帰ってることはないからその辺探し回ればいるだろ。

それが、さっき明久が言ってたように

吹奏楽部の顧問なら第2音楽室あたりにいるんじゃないか？」

唯「おお、トモ君頭いいね」

平沢は称賛の眼差しを送ってくるがそんなに大したことじゃないだろ。

律「あ、いた」

田井中は一番後ろを歩いていた俺の方向を指さす。

振り返ってみると確かに一番奥の階段の前で何やら数人の生徒たちと会話していた。

俺がそっちに歩いて行こうとしたら田井中に肩を持たれた。

律「トモ、ちょっと待ってて」

智也「何でだ？」

律「いいから、いいから」

田井中は1年B組の教室に入っていた。

出てきたときにはノートを2冊持って出てきた。

そして、待っててといった割には俺たちを差し置いて先に一人で向かっていった。

律「何をしでかすつもりだ？」

漣「さあ？」

秋山も首をかしげる。

俺たちは田井中の行動に不思議がりながらも一応後をついていった。

律「山中さわ子。我が校の音楽教師である。

その綺麗な顔立ちとやわらかな物腰で、

生徒だけでなく教師の間でも人気が高い。

更に楽器の腕前や歌声も素晴らしく、

ファンクラブが存在するほどの人気がある」

田井中はくるっと丸めた自分のノートを双眼鏡代わりにして何故かナレーションのような話し方をしていた。

しかも内容は山中先生を持ち上げているような内容だ。

智也「持ち上げ作戦かよ」

俺は山中先生には届かない程度でボソツと言った。

山中「あの・・・さっきから何を言ってるの？」

当然俺たちの事情を知らない山中先生は疑問に感じる。
平沢たちが田井中の周りに集まる。

唯・律・漣・紬「」「」「先生！」「」「」

山中「はいっ！」

4人の勢いにのまれて返事をする。

律「軽音部の顧問になってください！」

田井中が代表になって切り出した。

山中「まだ顧問居なかったんだ・・・」

そういう先生の言葉の中には少し呆れが混じっている。

紬「先生しか頼める人がいないんです」

漣「お願いします」

秋山や琴吹も説得するが、

山中「ごめんなさい。なつてあげたいのは山々なんだけど、私吹奏楽部の顧問をしているから掛け持ちはちょっと・・・」

あえなく沈没する。

明久「やっぱりダメかなあ」

智也「難しいだろうな」

そこで田井中は、

律「今まで声をかけてきた男は数知れず」

また持ち上げ作戦をする。

山中「だ、だからおだてても無理です！」

しかしこれもあえなく失敗。

明久「顧問っていつでも実質名前だけですから」

智也「練習とかも自分たちで今までやってきたし、後は顧問の先生だけなんですよ」

仕方がないので俺と明久も加勢する。

漣「時間なら取らせません！」

秋山がさらに後押しをする。

律「そうそう、ここに名前書いて判子押すだけ。ね、簡単でしょ」

田井中は山中先生の顔の前で部活申請用紙をひらひらさせる。

その言葉、この状況知らない人が聞いたら絶対怪しい勧誘に見えるな。

などと考えつつもこの後もしも断られたときの対策を考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4050z/>

バカとけいおん！と召喚獣

2012年1月12日19時57分発行